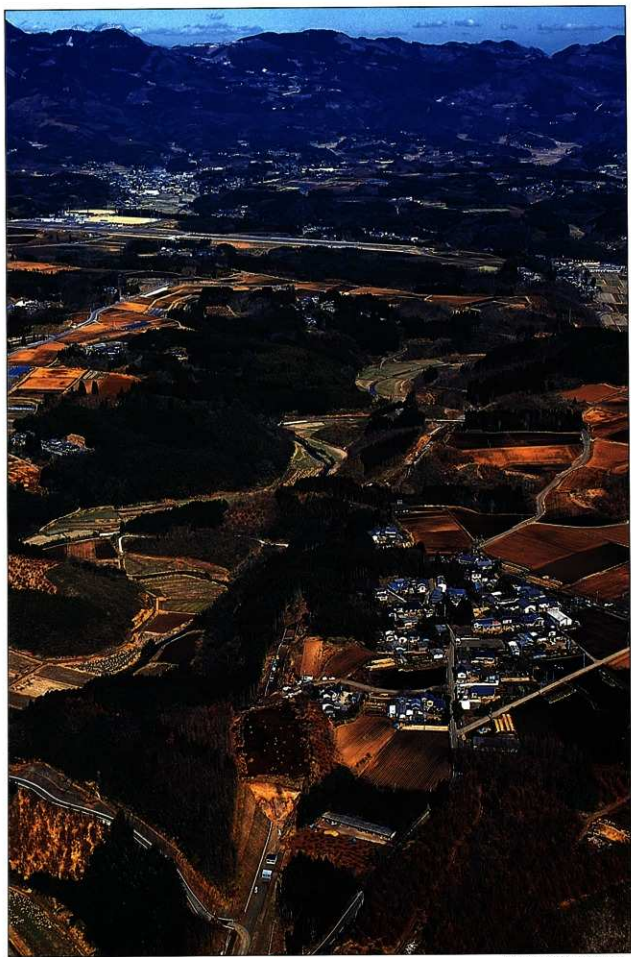


中原舟久手遺跡



2000
大分県教育委員会

中原舟久手遺跡



中原舟久手遺跡 空中写真

序 文

大野川の中流域に位置する大野町は、日当たりの良い小高い台地が開け、「大野原台地」と称されています。この一帯は、いにしえ人が生活するうえで、適した環境であったと考えられ、先史時代から原史時代の遺跡が豊富に点在しています。

本書は、平成9年10月中旬から平成10年2月上旬にかけて実施した、ふるさとづくり事業 主要地方道 三重野津原線の大野町中原工区の道路改修に伴う、中原舟久手遺跡の発掘調査報告書です。

中原舟久手遺跡は、弥生時代後半から古墳時代初頭までを中心とした環濠集落と推測されます。濠に囲まれた村には、日常生活の空間とともに、大野川流域の遺跡では珍しい墓地が発見され、当時の社会や地域の歴史を知る上で、大変貴重で重要な資料となりました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・保存並びに教育・学術の振興、及び地域文化の向上のために活用されることを期待いたします。

最後に、この調査に御協力をいただきました関係各位及び地元の方々に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成12年3月

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

例 言

1. 本報告書は、ふるさとづくり事業 主要地方道 三重野津原線の犬野町中原工区の道路改修に伴う、中原舟久手遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大分県土木建築部三重土木事務所の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。
3. 遺物の整理作業は、大分県教育庁文化課文化財資料室の整理補佐員がおこない、遺物の実測・トレース・写真撮影は、文化課職員・嘱託職員がおこなった。
4. 出土遺物及び関係資料は、大分県教育庁文化課文化財資料室で保管している。
5. 本書で使用した地図等は国土地理院作成のものを利用した。
6. 第6章はバリノ・サーベイの分析による。
7. 本書の執筆・編集は、調査を担当した栗田勝弘が行った。

本 文 目 次

第1章 はじめに	1
1. 調査経過	1
2. 調査団の構成	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 調査の概要と調査区の設定	7
第4章 検出遺構と遺物	9
1. 竪穴遺構	9
1号 (a, b) 竪穴	9~11
2号竪穴	12~13
3号竪穴	13~14
4号 (a, b, c) 竪穴	14~16
5号竪穴	16~17
6号 (a, b) 竪穴	17~20
7号 (a, b) 竪穴	20~22
8号竪穴	23~24
9号竪穴	24~25
10号竪穴	26
11号竪穴	26~27
12号竪穴	27
13号竪穴	28
14号竪穴	28~29
15号竪穴	29
16号竪穴	29
17号竪穴	29~30

2. 土坑状遺構	31
1号土坑	31
2号土坑	31~32
3号土坑	32
4号土坑	33
5号土坑	33
6号土坑	34
7号土坑	34
8号土坑	34~35
9号土坑	35
10号土坑	35
11号土坑	36
12号土坑	36
13号土坑	36
3. 溝状遺構	37
1号溝状遺構	37
2号溝状遺構	37
3号溝状遺構	37
4. 掘立柱遺構	38
1号掘立柱遺構	38
2号掘立柱遺構	38
3号掘立柱遺構	38
4号掘立柱遺構	38
5号掘立柱遺構	38
5. 表面採集遺物	39
旧石器時代の遺物	39
縄文・弥生時代の遺物	39~43
第5章 まとめと考察	45
竪穴の規模と時期	45~46
土坑の用途・機能	46~47
付 章 土坑等に関する自然科学調査	49~54

図 版 目 次

第1図 中原舟久手遺跡の位置	2
第2図 中原舟久手遺跡と周辺の主要遺跡分布図 (国土地理院1/25,000の地図による。)	3
第3図 中原舟久手遺跡と周辺地形図 (1/5,000)	6
第4図 中原舟久手遺跡調査区の空中写真	7
第5図 中原舟久手遺跡遺構配置図 (1/400)	8
第6図 中原舟久手遺跡1号a竪穴実測図 (1/60)	9
第7図 中原舟久手遺跡1号(a、b)竪穴実測図 (1/60)	10
第8図 中原舟久手遺跡1号竪穴出土土器実測図 (1/4)	10

第9図	中原舟久手遺跡1号竪穴出土石器実測図 (1は1/3、2は1/6)	11
第10図	中原舟久手遺跡1号竪穴出土鉄器実測図 (2/3)	11
第11図	中原舟久手遺跡2号竪穴実測図 (1/60)	12
第12図	中原舟久手遺跡2号竪穴出土土器実測図 (1/4)	13
第13図	中原舟久手遺跡2号竪穴出土石器実測図 (1/3)	13
第14図	中原舟久手遺跡3号竪穴実測図 (1/60)	14
第15図	中原舟久手遺跡3号竪穴出土土器実測図 (1/4)	14
第16図	中原舟久手遺跡4号 (a、b、c) 竪穴実測図 (1/60)	15
第17図	中原舟久手遺跡4号竪穴出土土器等実測図 (1/4)	16
第18図	中原舟久手遺跡4号c 竪穴出土石器実測図 (1/3)	16
第19図	中原舟久手遺跡5号竪穴実測図 (1/60)	16
第20図	中原舟久手遺跡5号竪穴出土土器実測図 (1/4)	17
第21図	中原舟久手遺跡5号竪穴出土石器実測図 (1は2/3、2は1/3)	17
第22図	中原舟久手遺跡6号 (a、b) 竪穴実測図 (1/60)	18
第23図	中原舟久手遺跡6号竪穴出土石器実測図 (2/3)	19
第24図	中原舟久手遺跡6号竪穴出土石器実測図 (1/3)	19
第25図	中原舟久手遺跡6号竪穴出土土器実測図 (1/4)	19
第26図	中原舟久手遺跡7号 (a、b) 竪穴実測図 (1/60)	20
第27図	中原舟久手遺跡7号竪穴出土土器実測図 (1/4)	21
第28図	中原舟久手遺跡7号a 竪穴出土石器実測図 (1/3)	22
第29図	中原舟久手遺跡7号b 竪穴出土石器実測図 (1/3)	22
第30図	中原舟久手遺跡8号竪穴実測図 (1/60)	23
第31図	中原舟久手遺跡8号竪穴出土土器実測図 (1/4)	24
第32図	中原舟久手遺跡8号竪穴出土鉄器実測図 (2/3)	24
第33図	中原舟久手遺跡9号竪穴出土土器実測図 (1/4)	25
第34図	中原舟久手遺跡9号竪穴実測図 (1/60)	24
第35図	中原舟久手遺跡10号竪穴実測図 (1/60)	26
第36図	中原舟久手遺跡10号竪穴出土土器実測図 (1/4)	26
第37図	中原舟久手遺跡10号竪穴出土石器実測図 (1/3)	26
第38図	中原舟久手遺跡11号竪穴実測図 (1/60)	26
第39図	中原舟久手遺跡11号竪穴出土土器実測図 (1/4)	27
第40図	中原舟久手遺跡12号竪穴実測図 (1/60)	27
第41図	中原舟久手遺跡12号竪穴出土土器実測図 (1/4)	27
第42図	中原舟久手遺跡13号竪穴実測図 (1/60)	28
第43図	中原舟久手遺跡13号竪穴出土土器実測図 (1/4)	28
第44図	中原舟久手遺跡14号竪穴実測図 (1/60)	28
第45図	中原舟久手遺跡14号竪穴出土土器実測図 (1/4)	29
第46図	中原舟久手遺跡14号竪穴出土遺物実測図 (2/3)	29
第47図	中原舟久手遺跡15号竪穴実測図 (1/60)	29
第48図	中原舟久手遺跡15号竪穴出土石器実測図 (1/6)	29
第49図	中原舟久手遺跡16号竪穴実測図 (1/60)	30
第50図	中原舟久手遺跡16号竪穴出土土器実測図 (1/4)	30
第51図	中原舟久手遺跡17号竪穴実測図 (1/60)	30

第52図	中原舟久手遺跡17号竪穴出土石器実測図 (1/4)	30
第53図	中原舟久手遺跡17号竪穴出土石器実測図 (1/3)	30
第54図	中原舟久手遺跡1号土坑実測図 (1/30)	31
第55図	中原舟久手遺跡2号土坑実測図 (1/30)	31
第56図	中原舟久手遺跡2号土坑出土石器実測図 (1/4)	32
第57図	中原舟久手遺跡2号土坑出土石器実測図 (1/3)	32
第58図	中原舟久手遺跡3号土坑実測図 (1/30)	32
第59図	中原舟久手遺跡3号土坑出土石器実測図 (1/4)	33
第60図	中原舟久手遺跡4号土坑実測図 (1/30)	33
第61図	中原舟久手遺跡5号土坑実測図 (1/30)	33
第62図	中原舟久手遺跡6号土坑実測図 (1/30)	34
第63図	中原舟久手遺跡7号土坑実測図 (1/30)	34
第64図	中原舟久手遺跡8号土坑実測図 (1/30)	35
第65図	中原舟久手遺跡8号土坑出土鉄器実測図 (2/3)	35
第66図	中原舟久手遺跡9号土坑実測図 (1/30)	35
第67図	中原舟久手遺跡10号土坑実測図 (1/30)	36
第68図	中原舟久手遺跡11号土坑実測図 (1/30)	36
第69図	中原舟久手遺跡12号土坑実測図 (1/30)	36
第70図	中原舟久手遺跡13号土坑実測図 (1/30)	36
第71図	中原舟久手遺跡1号溝状遺構実測図 (1/60)	37
第72図	中原舟久手遺跡2号溝状遺構実測図 (1/60)	37
第73図	中原舟久手遺跡1号掘立柱遺構実測図 (1/60)	38
第74図	中原舟久手遺跡2号掘立柱遺構実測図 (1/60)	38
第75図	中原舟久手遺跡3号掘立柱遺構実測図 (1/60)	39
第76図	中原舟久手遺跡4・5号掘立柱遺構実測図 (1/60)	39
第77図	中原舟久手遺跡出土石器実測図 (2/3)	40
第78図	中原舟久手遺跡出土石器実測図 (2/3)	40
第79図	中原舟久手遺跡出土の縄文土器実測図 (1/3)	41
第80図	中原舟久手遺跡出土土器等実測図 (1/3)	42
第81図	中原舟久手遺跡出土石器実測図 (2/3)	42
第82図	中原舟久手遺跡出土石器実測図 (1/3)	43
第83図	中原舟久手遺跡の竪穴と土坑の規模	45
第84図	中原舟久手遺跡の竪穴面積と付属施設	46
第85図	中原舟久手遺跡の竪穴長軸方位	47
第86図	中原舟久手遺跡の土坑長軸方位	47
第87図	中原舟久手遺跡の掘立柱遺構長軸方位	47
第88図	8号土坑の脂肪酸分析結果	51
第89図	8号竪穴住居内の不定形土坑の脂肪酸分析結果	52

表 目 次

第1表 中原舟久手遺跡と周辺の主要遺跡分布図	4~5
第2表 竪穴遺構一覧表	44
第3表 土坑状遺構一覧表	44
第4表 各土坑のリン分析結果	50
第5表 脂肪酸分析結果	50

写 真 図 版 目 次

写真図版1 中原舟久手遺跡発掘風景	1号a 竪穴検出状態	1号a、b 竪穴検出状態—55
写真図版2 2号竪穴検出状態	2号竪穴遺物出土状態	3・4・10号竪穴検出状態—56
写真図版3 5号竪穴内土層検出状態	5号竪穴検出状態	5号竪穴内遺物出土状態—57
写真図版4 6号竪穴検出状態	6号a 竪穴遺物検出状態	7号竪穴検出状態—58
写真図版5 8号竪穴検出状態	9号竪穴検出状態	9号竪穴内土坑検出状態—59
写真図版6 11号竪穴検出状態	12号竪穴検出状態	13号竪穴検出状態—60
写真図版7 14号竪穴検出状態	15号竪穴検出状態	16号竪穴検出状態—61
写真図版8 1号土坑遺物出土状態	2号土坑遺物出土状態	3号土坑遺物出土状態—62
写真図版9 4号土坑半截状態	4号土坑検出状態	5号土坑半截状態—63
写真図版10 5号土坑検出状態	6号土坑半截状態	6号土坑検出状態—64
写真図版11 7号土坑半截状態	8号土坑半截状態	8号土坑検出状態—65
写真図版12 8号土坑床面鉄鍍出土状態	9号土坑半截状態	10号土坑検出状態—66
写真図版13 11号土坑検出状態	1号溝状遺構検出状態	2号溝状遺構検出状態—67
写真図版14 旧石器時代の石器と縄文時代の土器		68
写真図版15 縄文時代の土器と石器		69
写真図版16 弥生時代の土器		70
写真図版17 弥生時代の土器		71
写真図版18 弥生時代の土器底部と土器片加工品		72
写真図版19 弥生時代の土器		73
写真図版20 弥生時代の土器片加工品と石器		74
写真図版21 弥生時代の石器、土製品、石製品、鉄器		75

第1章 はじめに

1. 調査経過

大分県大野郡大野町大字中原舟久手に所在する中原舟久手遺跡の発掘調査は、ふるさとづくり事業県道三重・野津原線改良工事に伴う、事前の緊急発掘調査として実施された。

調査対象地域は、県道三重・野津原線改良工事に伴って深さ数メートルに渡って削平される丘陵部であり、その範囲は、南北約90メートル、東西約35メートルの約3,000平方メートル程である。すでに、遺跡の北寄りと南寄りは工事現場がせまっており、両端は大きく削平が行われていた。

調査期間は、平成9年10月14日から平成10年2月6日の約3.5箇月間に渡って実施された。

発掘調査の結果、弥生後期後半～終末前後の竪穴住居跡22基や土坑13基、掘立柱遺構5基、溝状遺構4本、柱穴等が多数検出されている。その内、土坑には墓地と推測されるまとまりがあり、副葬品を伴うものも発見されている。これまで、大野川流域一帯の火山灰台地に展開する多くの遺跡からは、発掘調査による当該期の墓地の発見は乏しく、極めて注目される事例と言っても過言ではない。

また、調査区の北側と南側の隅では、地形に沿った形で、浅い溝が検出されており、溝に囲まれた「環濠集落」という弥生の村の一端が推測されている。

2. 調査団の構成

中原舟久手遺跡の調査体制(平成9年度)は次のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会

調査指導 賀川光夫(別府大学名誉教授)

調査員 栗田勝弘(大分県教育庁文化課 副主幹)

近藤晃弘(大分県教育庁文化課 嘱託)

現地の発掘調査には、大野町在住の人々を1日に約十人程度の割合で、発掘調査作業員として日々雇用した。

なお、調査中、大野町教育委員会の文化財調査員の視察や、南部小学校の児童等の見学があった。



発掘調査風景

第2章 遺跡の立地と環境

中原舟久手遺跡は、大分県大野郡大野町大字中原舟久手（第1図）に所在している。遺跡は大野川の支流、田代川左岸の丘陵上に位置している。この周辺の小高い丘陵は、「大野原台地」と総称されるように、狭い独立状の台地が点在している。このような台地は、人が生活するには便利がよかつたとみえ、台地上を踏査すると、必ずといえるほどに、石器や土器の破片を表面採集することが可能である。第2図は、このような踏査を元に作成した、中原舟久手遺跡とその周辺の遺跡分布図である。小さな小谷を挟んで数百メートルごとに先史・原史時代の遺跡が数多く点在しているこ

とが判る。しかしながら、「大野原台地」一帯は、早い段階での畑地帯総合土地改良事業による造成工事によって、一部消滅を余儀なくされた遺跡も数多く存在することも事実であり、開発に先立って事前に発掘調査された遺跡は比較的少ない。ここでは、中原舟久手遺跡と関係のありそうな周辺遺跡群を瞥見してみる。

旧石器時代

「大野原台地」には、大野川流域やその支流に点在するホルンフェルスを原材とした、数多くの旧石器時代の遺跡が遺存している。特に、大塚遺跡（21）、宮地前遺跡（41）、大野高校遺跡（88）、製糸工場前遺跡（2）、今峠遺跡（24）、片島道下遺跡（31）、二本木遺跡（91）、松の木遺跡（44）、駒方遺跡c地点（57）は、表面採集や付随的に出土した資料であるが、学史的には注目される著名な遺跡が多い。特に、今峠遺跡出土のナイフ形石器は、基部に若干加工を施す特徴的なもので、今峠型ナイフ形石器と呼ばれている。また、代ノ原遺跡群（89）の泥炭層から発見された植物遺体とナウマン象の化石骨は、旧石器時代の植生や動物相を探る上での稀有な資料である。

縄文時代

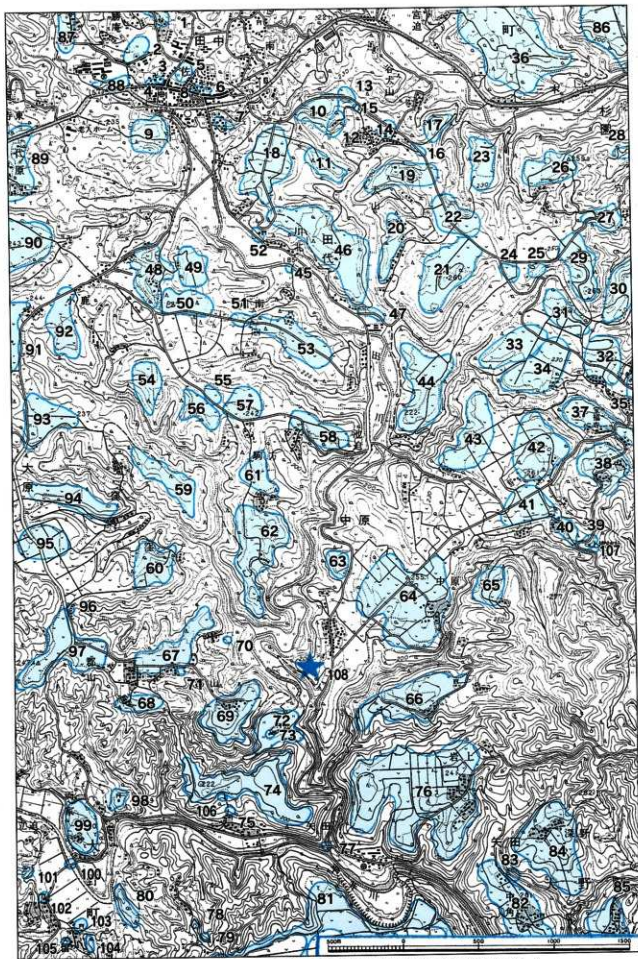
縄文時代の早期を代表するのは、宝福寺遺跡（37）、郡山遺跡（69）、夏足原遺跡（81）の押型文土器である。前期は宮地前遺跡（41）、井野遺跡（30）で轟式土器が表採されている。後期・晩期では、夏足原遺跡（81）、松の木遺跡（44）、二本木遺跡（91）、片島原西遺跡（33）で磨消縄文を施す西平式土器や三万田式土器、黒色磨研土器と、これ等に伴う扁平打製石斧が検出されている。特に、三万田期の細線羽状文が施された夏足原遺跡（81）の注口土器は逸品である。また、駒形遺跡B地点（56）では三万田期の土偶頭部が発見されている。

弥生時代～古墳時代

大野原台地の弥生時代は、環濠集落と推察される松の木遺跡（44）と二本木遺跡（91）で象徴される。いずれも大野川中流域の有数な遺跡であり、切り合い関係を保つ数多くの堅穴住居跡と共に、土器、石器、鉄器類が多数発見されている。これらの遺跡からは、中国後漢時代の方格規矩文鏡や内行花文鏡の破片が検出されており、遺跡の発掘調査とその分析によって、これまで詳らかでなかった、弥生時代後期～古墳時代前葉の土器編年が6期程度にまとめられた。松の木遺跡と二本木遺跡の調査成果は、大野川中流域の土器編年のメルクマールとなり得るものである。



第1図 大野町の中原舟久手遺跡の位置

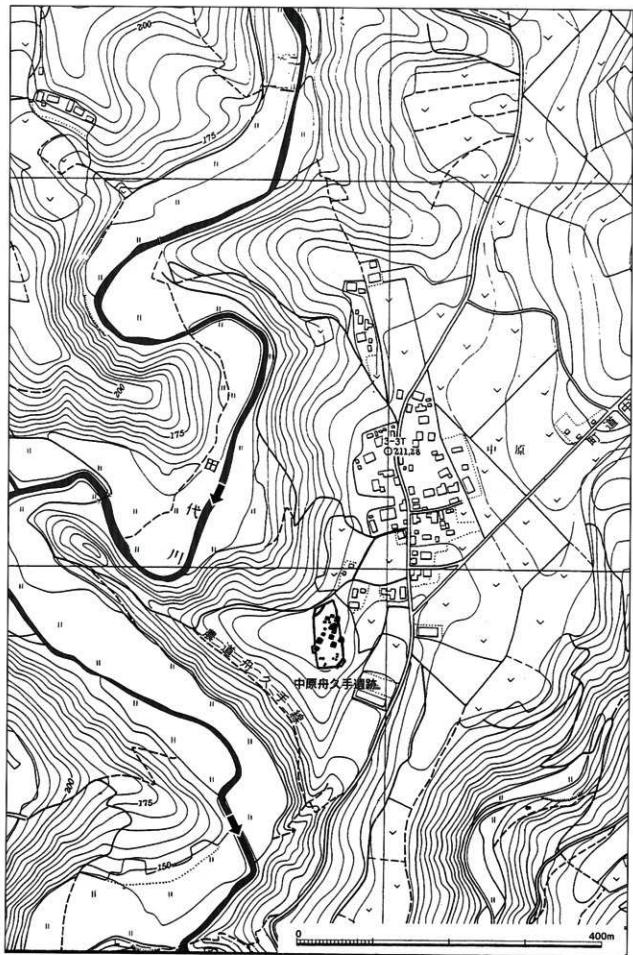


第2図 中原舟久手遺跡と周辺の主要遺跡分布図 (国土地理院1/25,000の地図による。)

第1表 中原向久手遺跡と周辺の主要遺跡分布図

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	類別	時代	状況	保存状況	指定種別
1	砂礫堆	田中宇砂礫堆	丘陵	包蔵地ほか	鎌倉ほか	山林ほか	一部消滅	町
2	新井工場前遺跡	田中	台地	包蔵地	旧石器	工場地	一部消滅	
3	明峰寺境内遺跡	田中	沖積平野	寺院	中世ほか	寺社地	良好	
4	法盛寺境内遺跡	田中	低地	寺院ほか	中世ほか	寺社地	良好	
5	旧農楽寺跡	田中宇寺屋敷	丘陵	包蔵地	中世	住宅	一部消滅	
6	田中神社	田中宇池平	丘陵裾	館跡、神社	中世ほか	山林ほか	一部消滅	
7	観音堂遺跡	田中	丘陵尾根	包蔵地ほか	中世	公園ほか	一部消滅	
8	農楽寺(阿次氏館跡)	田中2411	自然遺跡	館跡、寺院	中世ほか	寺社地	一部消滅	
9	田中城跡	田中	台地	城跡	中世	畑・山林	良好	
10	津島居遺跡	田代宇大山	台地	包蔵地	縄文(晩期)	畑	一部消滅	
11	千仏・東遺跡	田代	台地	包蔵地	旧石器ほか	畑・山林	一部消滅	
12	稲原城	田代	台地裾	包蔵地ほか	中世	畑・山林	一部消滅	
13	花立遺跡	田代宇花立	台地	包蔵地	旧石器ほか	畑	一部消滅	
14	カジヤ遺跡	田代宇カジヤ	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑・住宅	一部消滅	
15	西ヶ追石礫々身	常道宇西ヶ追	台地斜面	石遺物	中世	畑	一部消滅	
16	トラゴゼン遺跡	田代	台地	包蔵地ほか	中世	公園	良好	
17	天運・北遺跡	杉園	台地ほか	包蔵地ほか	江戸・明治	山林	良好	
18	千仏南遺跡	田中	台地	包蔵地	旧石器ほか	畑	一部消滅	
19	岡山遺跡	田代宇大山	台地	包蔵地	縄文(晩期)	畑	一部消滅	
20	植木寺屋敷遺跡	田代	台地	包蔵地ほか	旧石器	山林・住宅	良好	
21	大塚遺跡	田代宇大山	台地	包蔵地	旧石器ほか	畑	一部消滅	
22	えのきとくほ遺跡	田代	台地	包蔵地	旧石器ほか	畑	一部消滅	
23	天道南遺跡	杉園	台地	包蔵地	旧石器	畑	良好	
24	今神遺跡	田代	台地	包蔵地	旧石器	畑	一部消滅	
25	今神東遺跡	田代	台地	包蔵地	旧石器	畑	一部消滅	
26	萩志遺跡	杉園	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑	良好	
27	穴井北遺跡	杉園	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑	良好	
28	小雲北(長辺西)遺跡	杉園	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑	良好	
29	穴井遺跡	杉園	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑・山林	一部消滅	
30	井野遺跡	片島宇井野	台地	包蔵地	縄文ほか	畑	良好	
31	片島道下遺跡	片島道下	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑・山林	一部消滅	
32	下田尾遺跡	片島	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑	一部消滅	
33	片島向原西遺跡	片島宇西道	台地	集落	旧石器ほか	畑	一部消滅	
34	片島向原東遺跡	片島	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑	一部消滅	
35	田尾遺跡	片島宇田尾	台地	包蔵地	縄文ほか	畑	良好	
36	宮本南遺跡	宮迫	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑ほか	良好	
37	宝福寺遺跡	片島宇尾中	台地	包蔵地	縄文ほか	畑	良好	
38	大野宮町宅高遺跡	片島宇西1308	台地	包蔵地	縄文ほか	畑	良好	
39	上津社遺跡	片島宇上津山	台地	包蔵地	旧石器ほか	寺社地	一部消滅	
40	荒井遺跡	片島	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	山林・住宅	良好	
41	宮地前遺跡	片山宇宮地前	台地	包蔵地	旧石器ほか	畑	一部消滅	
42	三重野遺跡	片島	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑	一部消滅	
43	長辺遺跡群	中原	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑	一部消滅	
44	松の木遺跡	中原宇松木	台地	包蔵地	縄文・弥生	畑	一部消滅	
45	三輪橋	杉園宇三ッ木	河川敷	石遺物	大正	河川敷	良好	
46	川北遺跡	田代宇川北	台地	包蔵地	旧石器ほか	畑	一部消滅	
47	川北蔵穴	田代宇川北	台地	その他	古墳	山林	良好	
48	高土町遺跡	田代宇高土町	丘陵ほか	包蔵地ほか	中世	畑ほか	良好	
49	ガランバル遺跡	田代宇ガランバル	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	公園	消滅	
50	神原遺跡	田代宇神原	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	山林ほか	消滅	
51	石仏遺跡	田代宇石仏	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	道路・公園	消滅	
52	竹葉社	田代宇竹ノ木	台地斜面	神社ほか	室町	寺社地	良好	
53	杉園遺跡	田代宇杉園	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	道路・公園	一部消滅	

54	駒方西邊跡	中原字フノ谷	台地	包蔵地	旧石器	畑	一部消滅	
55	駒方津並直邊跡	田代字津並直	台地	包蔵地	旧石器	畑	一部消滅	
56	駒方邊跡B地点	田代字上古里	台地	包蔵地	旧石器・縄文	畑	一部消滅	
57	駒方神社邊跡C	田代字古尾	台地	包蔵地	旧石器ほか	畑	一部消滅	
58	駒方池治邊跡	中原字池治	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑	一部消滅	
59	篠北邊跡	大原	台地	包蔵地	旧石器ほか	山林	良好	
60	篠南邊跡	大原	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑・住宅	良好	
61	駒方上邊跡A	中原	台地	包蔵地	弥生	畑	一部消滅	
62	仏塚邊跡群	中原字台ノ原	台地端	包蔵地	弥生	畑	一部消滅	
63	木元邊跡	中原字木元	台地	包蔵地	縄文(晩期)	畑		
64	中原邊跡群	中原	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑・住宅	一部消滅	
65	平釘邊跡	中原字平釘	丘陵端	包蔵地	旧石器ほか	畑	良好	
66	矢射渡邊跡	中原字矢射渡	台地	包蔵地	旧石器	畑ほか	良好	
67	矢所邊跡群	中原(郡山)	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑ほか	良好	
68	下原邊跡群	中原字下原	台地	包蔵地	旧石器ほか	畑・住宅	良好	
69	郡山邊跡	中原	台地端	包蔵地	旧石器ほか	畑	一部消滅	
70	郡山塔ノ平玉輪塔	郡山字塔ノ原	台地	石造物	中世	墓池	良好	
71	郡山二段石礎	郡山字二段島	台地	石造物	中世	山林	一部消滅	
72	保田田名跡	中原字保多田	丘陵ほか	包蔵地ほか	中世ほか	水田ほか	良好	
73	赤天谷横穴	郡山	丘陵	その他	古墳	寺社地	一部消滅	
74	年ノ神原邊跡群	矢田	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑・山林	良好	
75	矢田しんげん石礎	矢田字しんげん	段丘	石造物	中世	山林	一部消滅	
76	岩上邊跡群	矢田字岩上	台地	包蔵地	縄文ほか	畑	一部消滅	
77	矢田橋	矢田字矢田	低地	石造物	大正	道路	良好	
78	新白堂塔	夏足字新白	段丘	石造物	中世	山林	良好	
79	塔ノ平宝篋印塔塔身	夏足字塔ノ原	台地	石造物	中世	山林	一部消滅	
80	夏足橋跡	夏足字城ヶ平	丘陵	橋跡	南北朝	山林	一部消滅	
81	夏足原邊跡	夏足字原	台地	包蔵地	縄文ほか	畑	良好	
82	中角邊跡群	矢田	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑ほか	一部消滅	
83	矢田中角石礎	矢田字中角	台地	石造物	中世	山林	一部消滅	
84	深野邊跡	矢田字深野	台地	包蔵地	弥生	畑	良好	
85	佐野邊跡	小倉木字佐野	台地	包蔵地	縄文ほか	畑	良好	
86	上園邊跡群	村園字上園	台地	包蔵地	縄文ほか	畑	一部消滅	
87	若宮神社邊跡	田中字丸山	自然遺跡	包蔵地ほか	古墳・中世	水田ほか	一部消滅	
88	大野高交邊跡	田中	台地	包蔵地	旧石器	その他	一部消滅	
89	代ノ原邊跡群	酒井寺	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑・住宅	一部消滅	
90	辻台邊跡群	嵐原	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑	一部消滅	
91	二本木邊跡	大原字住吉	台地	包蔵地	縄文(晩期)弥生	畑	一部消滅	
92	小籠邊跡	中原字小籠	台地	包蔵地	縄文(晩期)	畑	一部消滅	
93	近中邊跡	大原字住吉	台地	包蔵地	弥生	畑	一部消滅	
94	篠原邊跡	大原字篠	台地	包蔵地	縄文ほか	畑	良好	
95	郡山原邊跡	郡山字郡山	台地	包蔵地	弥生	山林	良好	
96	郡山千人塚	郡山字山伏塚	台地	墳墓	中世	山林	一部消滅	
97	郡山西邊跡群	郡山	台地	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑・住宅	一部消滅	
98	雲見社	夏足字小倉山	丘陵頂	包蔵地ほか	中世ほか	山林ほか	良好	
99	沢木邊跡	夏足	河津段丘	包蔵地ほか	旧石器ほか	畑・住宅	良好	
100	津留橋	夏足字津留	河川敷	石造物	大正	道路	良好	
101	折立横穴	夏足字津留	丘陵	その他	古墳	山林	良好	
102	門板跡	夏足字門	台地	石造物	中世	寺社地	良好	
103	天満社	夏足三徳	段丘	神社	南北朝	寺社地	良好	
104	津留横穴	夏足字津留	丘陵	その他	古墳	山林	良好	
105	三徳石礎							町
106	矢田妙見宝篋印塔							町
107	上津神社の鳥居							県
108	中原向久手邊跡	中原字向久手	丘陵	風害	旧・縄・弥生	山林	一部消滅	



第3圖 中原舟久手遺跡之周辺地形圖(1/5,000)

第3章 調査の概要と調査区の設定

中原舟久手遺跡は、大野川支流の田代川の左岸丘陵上に位置している。遺跡の標高は約210mを呈し、遺跡の範囲は、南北約90m、東西約35mの道路敷幅である。調査面積は、約3,000平方メートルである。発掘調査は、前年度の試掘調査結果に基づいて、表土を約30cm前後重機で剥ぎ遺構を検出する作業から行った。

発掘調査区は南北10m、東西8mを1調査区とし、これを便宜上、北～南に1～10、西～東にA～Hと称し区画設定をした。

その結果、遺構、遺物としては、旧石器時代の剥片類、縄文時代後期の土器や石器類が若干量出土したが、その主体は、弥生後期後半～終末期前後の竪穴や土坑、溝状遺構等であり、これ等に伴う土器、石器、鉄器等が多数検出されている。

弥生後期後半～終末期前後の竪穴遺構は1～17号竪穴まで確認し、これ等に切り合う遺構にはアルファベットの小文字番号を付けた。つまり、これ等をも含めると、竪穴遺構の合計は22基になる。

弥生後期後半～終末期前後の土坑は、1～13号まで確認している。中でも、竪穴遺構と若干の距離を保って、A・B・D-9調査区から検出された土坑は、墓坑と推測される一群であり、集落内での場の機能を考える上で留意される。

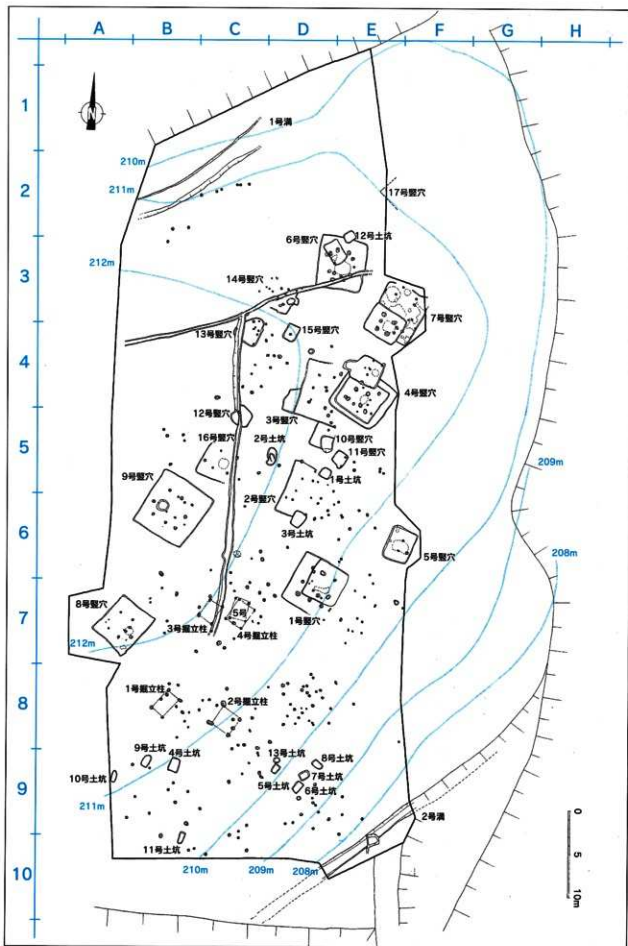
また、弥生後期後半～終末期前後の掘立柱遺構は、B-8、C-7・8調査区で5基検出している。

一方、調査区北のB・C-2調査区と調査区南のD・E・F-9・10調査区には、弥生後期後半～終末期前後の溝状遺構が検出されており、竪穴や土坑を包括した環濠集落の可能性を示唆している。



第4図 中原舟久手遺跡調査区の空中写真（向かって左が北）

第五圖 中國舟子手運跡遺構配置圖 (1/400)



第4章 検出遺構と遺物

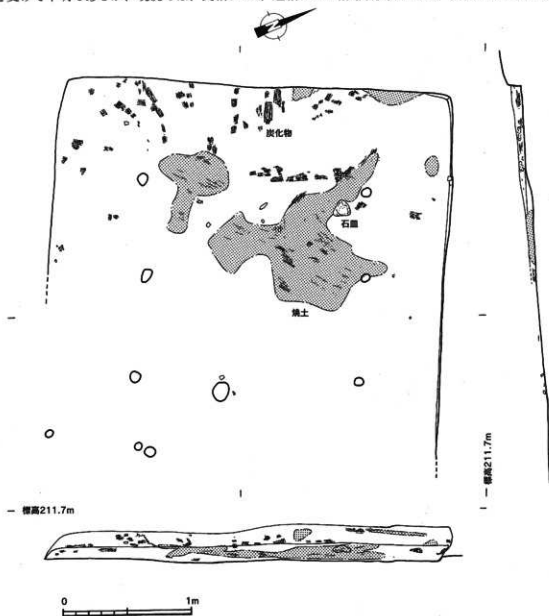
1. 竪穴遺構

調査区の北東部を除いて、北部・東部・南部は緩く落ちる谷部を形成しており、西部は約150m程度の余裕地を残して谷に落ちる。従って、地形的には、周囲を谷が巡る独立丘陵状を呈している。竪穴住居跡の分布から見て、調査対象地は、遺跡の東半分に相当すると推察される。

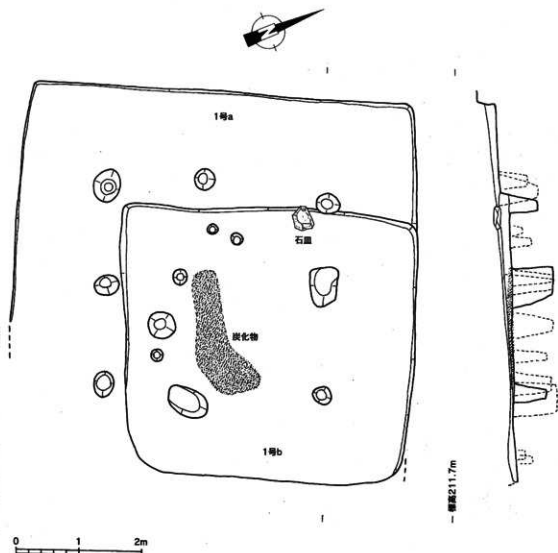
竪穴遺構は、南北約90m、東西約35mの調査区のほぼ中央部、標高約210mの小高い部分を中心に22基分布していた。竪穴遺構の中でも、1～9、16・17号竪穴の16基は焼土・炭化物炉、出土遺物等から竪穴住居跡と推察できるが、10～15号竪穴の6基は竪穴住居跡と推量するには狭く、作業小屋等の用途・機能を持つものであろう。

1号 (a, b) 竪穴(第6, 7図)

調査区の略中心部のD・E-6・7に所在する焼失家屋である。1号a竪穴の東と南のプランは削平を受けて不明であるが、現況では、長軸6.4m、短軸6mの略長方形形状を呈し、面積は38.4㎡である。



第6図 中原舟久手遺跡1号a竪穴実測図 (1/60)



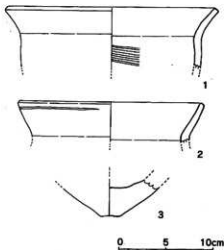
第7図 中原舟久手遺跡1号 (a、b) 竪穴実測図 (1/60)

竪穴の床面には、焼土や炭化物が確認できる。棒状の炭化物は西側辺部で約30cmの間隔を保ちつつ、竪穴の中心に向いており、竪穴住居跡の垂木の一部と推量できる。

主柱穴は、北側から3本、2本、3本であるが、柱穴は細く、径10cm前後の中空であった。柱は焼失によって、朽ち果てたものである。つまり、抜き取りによる柱の再利用をしなかった証拠でもある。

1号a竪穴の北側辺・東側辺を共有する位置で、1号b竪穴が発見されている。1号b竪穴は、長軸4.8m、短軸4.2mの略長方形で、深さは約20cmを呈する。面積は20.2㎡である。主柱穴は4本で、その内、少なくとも3本は1号a竪穴と共有している。床面の南側には炭化物があり、その南中央には補助柱が2本位置している。

1号b竪穴が古く、1号a竪穴が新しい。家屋を拡張したのかもしれない。



第8図 中原舟久手遺跡
1号竪穴 (1は1号a竪穴、2・3は1号b竪穴)
出土土器実測図 (1/4)

出土遺物(第8図)

第8図1は1号a 竪穴出土の甕形土器である。表裏は撫ぜ調整され、内面は刷毛目調整痕跡を残している。口径22cmを測る。

2は1号b 竪穴出土の甕形土器の口縁部である。口縁は内湾気味であり、口縁付近には沈線が部分的に認められる。口径は19.4cmである。

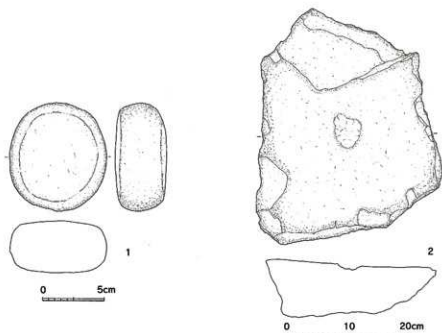
3は1号b 竪穴出土の甕形土器の底部である。底径は約2cmであり、形態は尖底に近い。

第9図1は1号b 竪穴出土の安山岩製の磨石である。表裏は磨滅し使い込まれている。重さ512.8g。

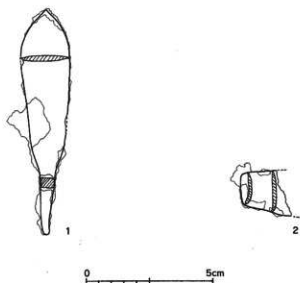
2は1号a 竪穴出土の安山岩製の石皿である。表面は磨滅し光沢を帯びている。中央は敲打による窪み部がある。重さ12kg。

第10図は1号a 竪穴出土の鉄器である。1は長さ8.9cm、最大幅は2cmの鉄族である。重さ10.9g。

2は器種不明な鉄器である。手鐐の破片であろうか。重さ2.7g。



第9図 中原舟久手遺跡1号竪穴(1は1号b 竪穴、2は1号a 竪穴)出土石器実測図(1は1/3、2は1/6)



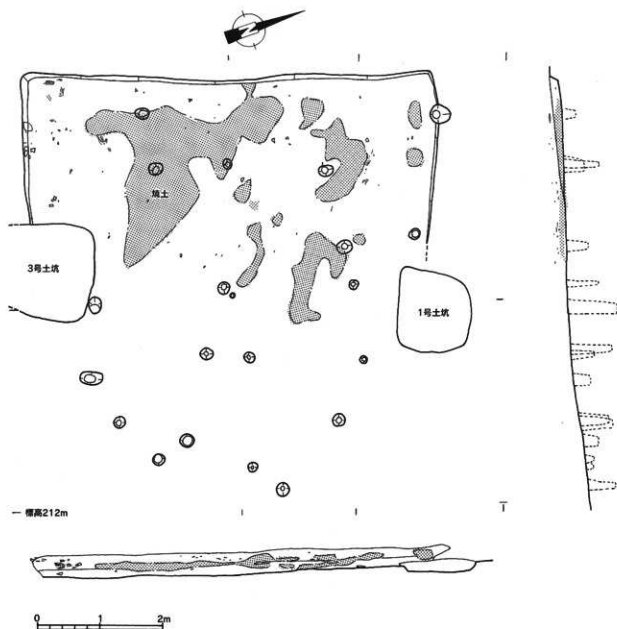
第10図 中原舟久手遺跡1号a 竪穴出土鉄器実測図(2/3)

2号竪穴 (第11図)

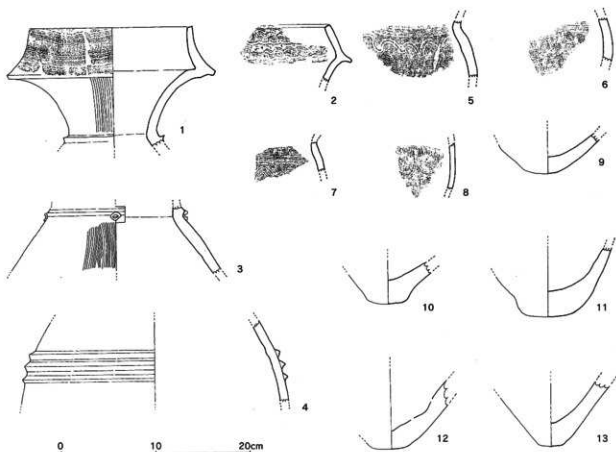
1号竪穴の6mほど北よりの調査区中央部に位置している焼失家屋である。竪穴は西半分を残すのみで、東半分は地形の傾斜に沿って削平されている。北側辺で1号土坑、南側辺で3号土坑と切りあっている。竪穴は西側辺で6.6mであり、確認面から20cm程度で床面である。竪穴は、焼土や炭化物が覆っていた。支柱穴は明瞭ではないが、西側辺に沿った3本の柱穴がこれに伴うものであろう。

出土遺物 (第12、13図)

第12図1~4は壺形土器である。1、2の二重口縁部には柳描波状文を施している。1の口径は17.2cmを測る。3は頸部であり、断面三角形の突帯文には、退化した勾玉状の貼文が施されている。4は壺の胴部上半に断面三角形の突帯文が三条巡っている。5~8は壺形土器の胴部上半部の破片で



第11図 中原舟久手遺跡2号竪穴実測図 (1/60)



第12図 中原舟久手遺跡2号竪穴出土土器実測図 (1/4)

ある。櫛描平行線文と櫛描波状文を併用して文様構成している。9～13は底部片である。9は壺形土器、その他は甕形土器のものであろう。

第13図は安山岩製の石器である。表面は磨石、礫の周縁部は敲打痕跡を顕著に残している。重さ119.4g。

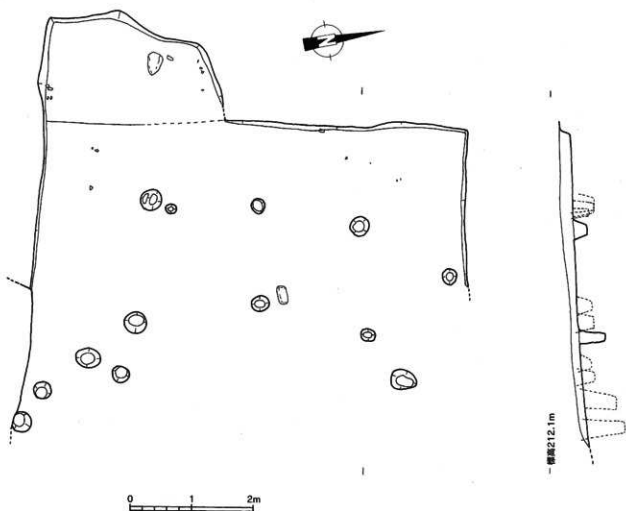
3号竪穴 (第14図)

2号竪穴の6mほど北よりに位置している。3号竪穴は西半分を残すのみで、東半分は地形の傾斜と4号竪穴に切られている。竪穴の西側辺は6.8mで、確認面から床面までは約20cmを測る。主柱穴は側辺に沿う何本かは推測できるが、明確さに欠けている。

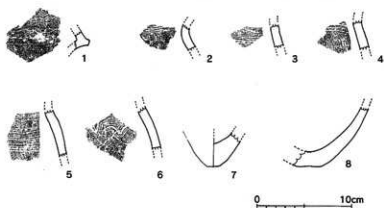
西側辺で土坑状の張り出し部がある。これは、長軸3m、短軸1.8mで深さは35cmを測り、竪穴に伴うものか、切りあい関係にあるのか判断できない。



第13図 中原舟久手遺跡2号竪穴出土石器実測図 (1/3)



第14図 中原舟久手遺跡3号竪穴実測図 (1/60)



第15図 中原舟久手遺跡3号竪穴出土土器実測図 (1/4)

出土遺物(第15図)

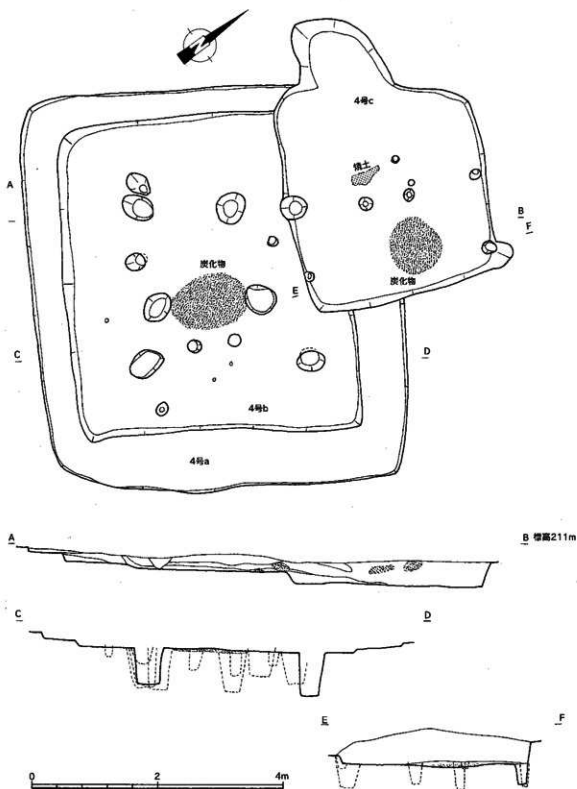
第15図1は櫛描波状文の二重口縁部である。2～6は甕形土器の胴部上半部の破片である。櫛描平行線文と櫛描波状文を併用して文様構成している。7～8は底部片である。甕形土器のものであろう。

4号(a、b、c)竪穴(第16図)

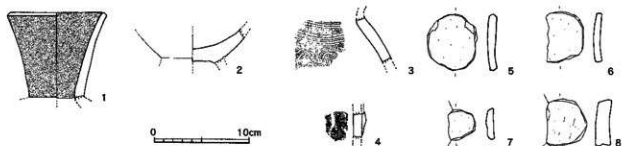
3号竪穴の東側を大きく切る位置関係にある。4号a竪穴は長軸6.4m、短軸6mの略長方形状であり、面積38.4㎡、確認面からの深さ20cmである。4号b竪穴は長軸5m、短軸4.6mの略長方形状であり、中央に炭化物炉がある。面積は23㎡で、確認面からの深さは20cmである。4号a竪穴は、位置的には4号b竪穴のベット状遺構の可能性もあるが、覆土の切りあい関係から推察して、4号b竪穴が古く、4号a竪穴は新しい。4号竪穴の支柱穴は弁別し難いが、中央部やや南よりに、炭化物の詰まった炉

跡があり、補助柱穴が2対遺存している様子である。

4号c 竪穴は長軸3.6m、短軸3.2mの略長方形形状であり、面積11.5㎡、確認面からの深さ40cmである。竪穴の中央には、焼上と細い二本の柱穴、その東側には浅い炭化物の炉跡が位置している。



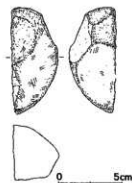
第16図 中原舟久手遺跡4号 (a、b、c) 竪穴実測図 (1/60)



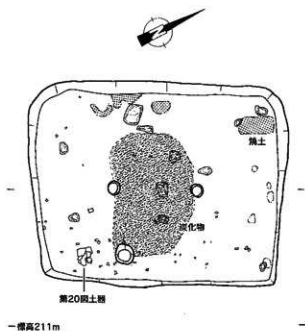
第17図 中原舟久手遺跡4号竪穴(2・4・5・7・8は4号c竪穴)出土土器等実測図(1/4)

出土遺物(第17、18図)

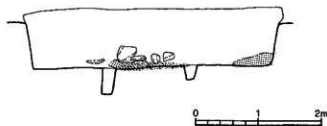
第17図1は4号竪穴出土の長頸壺の口縁部である。表裏は赤色顔料が塗られている。2は4号c竪穴出土の脚台付きの底部である。3は4号竪穴出土の甕の肩部である。櫛描の平行線文と波状文を



第18図 中原舟久手遺跡4号c竪穴出土石器実測図(1/3)



第20図土柱
一様高211m



第19図 中原舟久手遺跡5号竪穴実測図(1/60)

組み合わせた文様が特徴的である。4は4号c竪穴出土の甕の破片である。大野川上流域に普遍的な断面三角形の粘土紐を貼り付ける一群である。5～8は土器片加工品である。5は4号c竪穴出土で円形に仕上げている。30.4g。6～8は半円形に加工したものである。6は4号竪穴出土で20.6g。7は8.9g、8は39.3gで4号c竪穴出土である。

第18図は4号c竪穴出土の磨石である。安山岩製で半分欠損している。重さ16.0g。

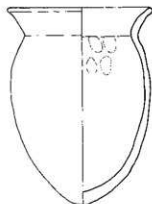
5号竪穴(第19図)

調査区の中央東端に位置している。竪穴は長軸4.2m、短軸3.2mの略長方形形状であり、面積は13.4㎡を測る。確認面から床面までの深さは80cmである。やや小型の竪穴であり、床面中央には焼けた凝灰岩や焼土が散見できる。焼けた凝灰岩は土器等の支脚として利用されたものであろう。

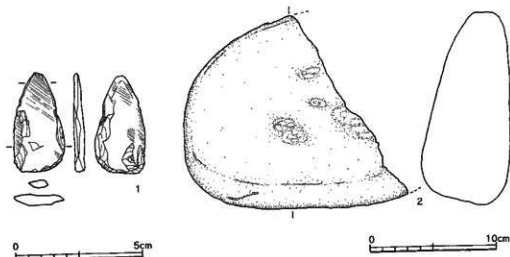
竪穴の覆土は、壁近くから徐々に堆積する流れ込みの状態を呈していた。竪穴の中央部には2本の主柱穴と炭化物炉跡が遺存していた。竪穴の南東隅には潰れた甕が出土している。

第20図は、竪穴の南東隅部の床面で発見された甕の考古学的完形品である。口縁部は緩く外反し、胴部は余り張らず、底部は尖った状態である。表裏は撫ぜ調整され、内面には指頭状の痕跡が残っている。口径15cm、器高20.8cmを測り、胴部の最大径は14.8cmである。

第21図1は結晶片岩製の石鏃である。基部を欠損しているが、最大長3.9cm、最大幅2cm、最大厚0.4cmを測る。重さ5.3g。2は安山岩製で、石皿・台石として使用されている。表面は敲打痕跡を留め、やや研磨された痕跡も残している。半分欠損している。重さ2.1kg。



第20図 中原舟久手遺跡
5号竪穴出土土器実測図(1/4)

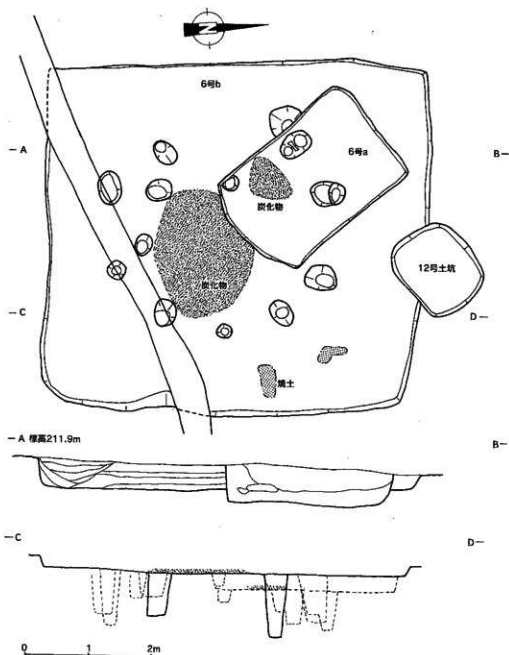


第21図 中原舟久手遺跡5号竪穴出土石器実測図(1は2/3、2は1/3)

6号(a、b)竪穴(第22図)

6号竪穴は、調査区の北東隅部に位置している。6号a竪穴は6号b竪穴の覆土上から掘り込まれた小型の竪穴である。長径は2.7m、短径は1.8mで長方形を呈する。面積は4.9㎡である。検出面から床面までは60cmを測る。この竪穴に伴う柱穴は確認できないが、床面には炭化物炉跡が遺存している。

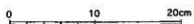
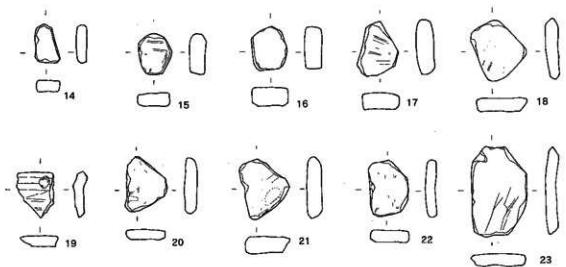
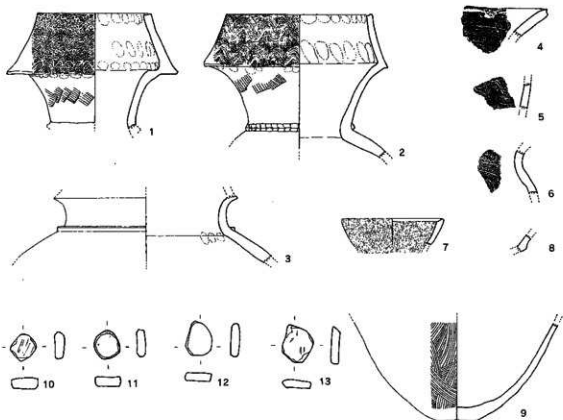
6号b竪穴は、長径は6.1m、短径は5.6mで略長方形を呈する。面積は34.2㎡である。検出面から床面までは40cmを測る。竪穴の南端には浅い溝状遺構が確認できるが、覆土の状態から、堀の境を区切る最近の溝である。この竪穴に伴う主柱穴は、略八角形状に配置された8本である。中央の南寄りには、炭化物炉跡と一対の柱穴が遺存している。なお、竪穴の北側辺の中央部は、12号土坑に切られている。



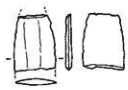
第22図 中原舟久手遺跡6号(a、b)竪穴実測図(1/60)

出土遺物(第23、24、25図)

第23図1、2は6号a竪穴出土の甕形土器の二重口縁部である。口縁部に櫛描波状文を施し、頸部には指頭痕跡を残す断面三角形の突帯を一条巡らせている。口縁部の内面は、指頭状の圧痕跡を残している。1の口径は13cm。2の口径は17cm。3の甕形土器は頸部の短い二重口縁部であり、断面三角形の突帯を一条巡らせている。4～6は甕形土器の破片である。4は6号a竪穴出土の口縁部で、5、6は頸部から胴上半部のものである。櫛描平行文や波状文を併用している。7は6号aの竪穴出土、口径12cmの椀形土器で表裏丹塗りである。8は6号b竪穴出土の精製した胎土の高坏であり、表裏丹塗りである。9は甕形土器の底部である。底部は径4cmであり、わずかに平底部を残している。10～23は土器片加工品である。土器片の周縁は研磨を受けており、円形のものや半円形のもの等もある。円形の10が最も小さくて直径3cmで1.8g、半円形の23が最も大きくて長さ10cm、幅6.5cmで重さは16.1gである。



第23図 中原舟久手遺跡6号壑穴〔1・2・4・7は6号a壑穴、8は6号b壑穴〕出土石器実測図（1/4）



第24図 中原舟久手遺跡6号a壑穴出土石器実測図（2/3）



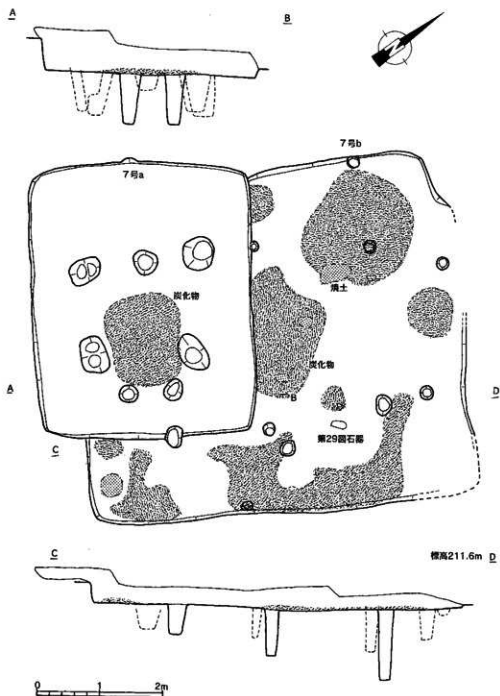
第25図 中原舟久手遺跡6号a壑穴出土石器実測図（1/3）

第24図は6号a 竪穴出土の結晶片岩製の石鏃である。先端部と基部を欠損している。最大幅1.6cmである。重さ1.9g。

第25図は6号a 竪穴出土の安山岩製の磨石・敲石である。表裏と周縁は研磨され、一部に敲打痕跡を残している。重さ102.8g。

7号 (a、b) 竪穴 (第26図)

7号a 竪穴は、長辺を西・東にとり、長軸4.4m、短軸3.5mを測る長方形プランである。面積は15.4㎡である。検出面から床面までは50cmを測る。支柱穴は4本であり、竪穴中央の東寄りには炭



第26図 中原舟久手遺跡7号 (a、b) 竪穴実測図 (1/60)

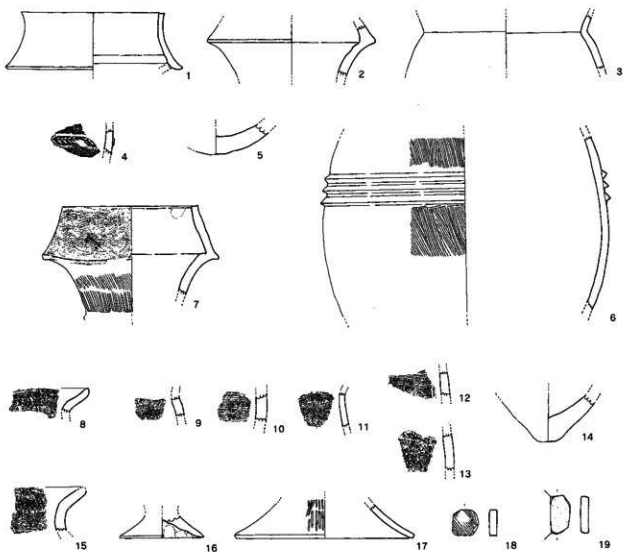
化物炉跡と一対の補助柱穴が遺存している。

7号b竪穴は、長辺を北・南にとり、長軸6m、短軸5.5mを測る長方形プランである。面積は33㎡である。検出面から床面までは40cmを測る。主柱穴は6本である。竪穴の床面は、炭化物や焼土が覆っており、焼失家屋の様相を呈している。主柱穴は中空のままであり、柱を抜いていった状況は認められていない。

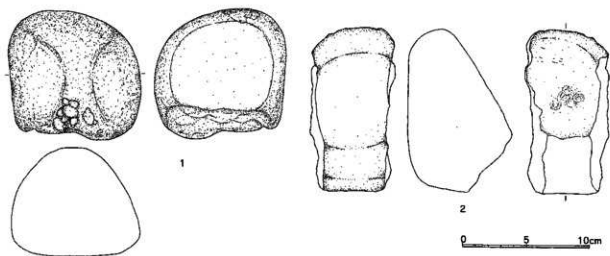
出土遺物 (第27、28、29図)

第27図1～6は7号a竪穴出土の遺物である。1、2は壺形土器の二重口縁部である。1は反り返る口縁部で、口径15cm。3は甕形土器の頸部である。4、6は壺形土器の胴部である。4は幅広の粘土紐に矢羽状の文様がある。6は胴部上半に断面三角形の突帯が三条巡る。5は壺形土器の丸底部である。

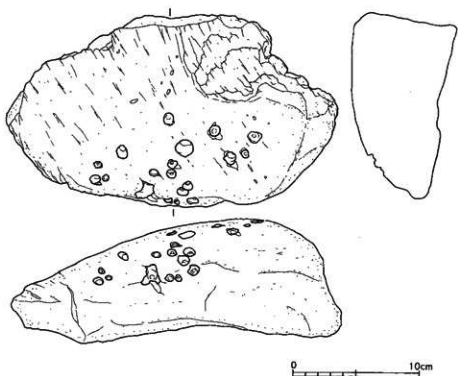
7～14は7号b竪穴出土の遺物である。7は壺形土器の二重口縁部であり、口径14cm。8は甕形土器の口縁部、9～13は胴部片である。楕円平行文や波状文を併用している。14は尖底気味な甕形土器の底である。



第27図 中原内久手遺跡7号竪穴 (1～6は7号a竪穴、7～14は7号b竪穴)
出土土器実測図 (1/4)



第28図 中原舟久手遺跡7号a 竪穴出土石器実測図 (1/3)



第29図 中原舟久手遺跡7号b 竪穴出土石器実測図 (1/3)

15～19は7号竪穴の一括資料である。15は甕形土器の口縁部。16、17は脚部である。16は鉢、17は表面を研磨した高坏の脚であろう。18、19は土器片加工品である。18は6.6g、19は12.2g。

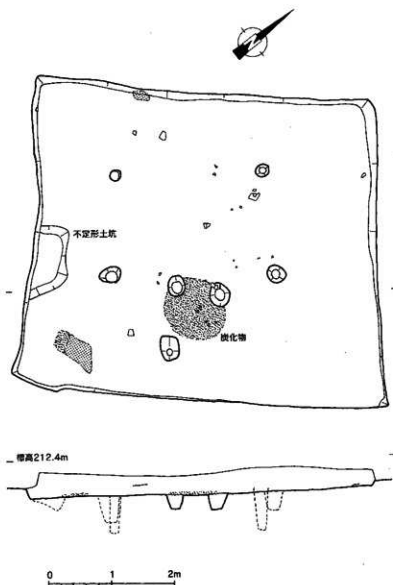
第28図は7号a竪穴出土の石器である。1は安山岩製の磨石である。一部に敲打痕跡を残している。重さ1.5kg。2は安山岩製の磨石の破片である。両面を磨耗し、一部に敲打痕跡を残している。重さ906g。

第29図は、7号b竪穴出土の石製品である。長さ26cm、幅15cm、厚さ8cmの焼けた凝灰岩に、

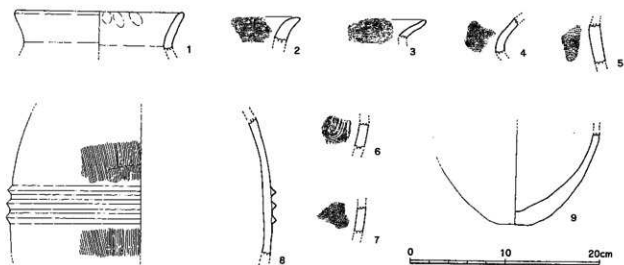
直径0.8～1cmの竹管状の物で、深さ5mm程度の円穴を19個所に穿っている。円穴の断面図をみると、中心部がやや盛り上がり、中空の竹管状のもので回転させながら穿ったもので、穴は表面に斜めにあいている。用途、機能は不明である。重さ1.5kg。

8号竪穴（第30図）

8号竪穴は、調査区の南西部に位置している。長辺を北・南にとり、長軸5.7m、短軸4.8mを測る長方形プランである。面積は27.4㎡である。検出面から床面までは20cmを測る。支柱穴は4本であるが、竪穴の東側中央には炭化物が跡があり、一対の補助支柱穴が遺存している。また、竪穴の南壁には不定形土坑が位置している。



第30図 中原舟久手遺跡8号竪穴実測図（1/60）



第31図 中原舟久手遺跡8号竪穴出土土器実測図 (1/4)

出土遺物(第31、32図)

第31図1～3は甕形土器の口縁部である。1の口径は18cm。4～7は櫛描波状文を施す甕形土器の頸部、胴部上半部である。8は甕形土器の胴部である。断面三角形の突帯文が三条巡っている。胴部の最大径は28cmである。9は底部である。底径は約3cm。

第32図は鉄鏝の先端部である。最大幅は1.2cm。



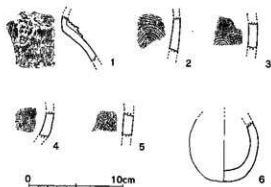
第32図 中原舟久手遺跡8号竪穴出土鉄鏝実測図 (2/3)

9号竪穴 (第33図)

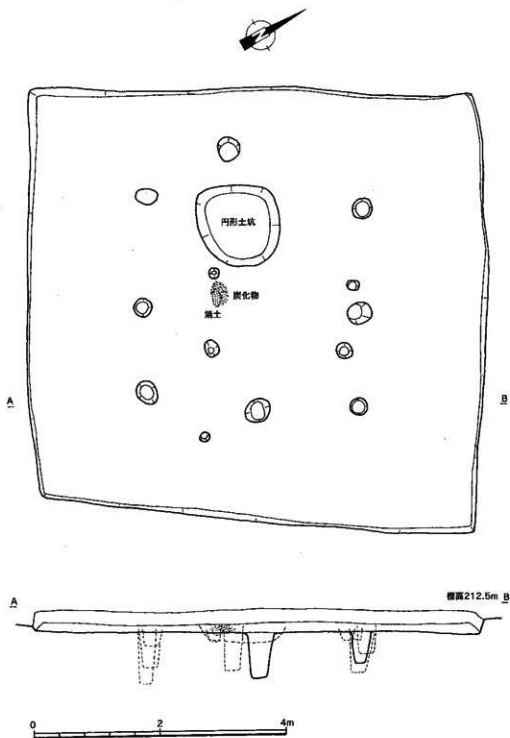
竪穴は調査区の中央西寄りに位置している。今回調査した中原舟久手遺跡では最大規模の竪穴である。長辺を北・南にとり、長軸は7.3m、短軸は6.9mの略長方形であり、面積は50.4㎡である。確認面から床面までは約20cmの深さである。支柱穴は8本であり、中央部に焼土と炭化物が位置している。中原舟久手遺跡内では最大の面積規模を誇る竪穴である。竪穴中央の西寄りには、長軸1.3m、短軸1.1mで深さ約30cmの円形土坑が出土している。円形土坑の覆土は、竪穴内のそれと色調等には変化はなく、出土遺物等も認められていない。

出土遺物 (第34図)

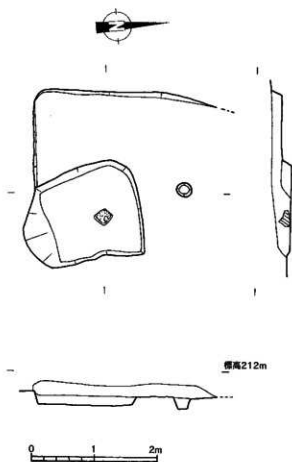
1は甕形土器の頸部である。首部に巡らした、斜め格子目状に刻んだ粘土紐の末尾は垂れている。2～5は甕形土器の胴部上半部である。櫛描平行文や波状文を併用している。6は丸底の小形の壺である。表面は撫ぜ調整を施す。



第34図 中原舟久手遺跡9号竪穴出土土器実測図 (1/4)



第33图 中原舟久手遺跡9号整穴実測図 (1/60)



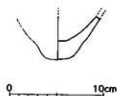
第35図 中原舟久手遺跡10号竪穴実測図 (1/60)

10号竪穴 (第35図)

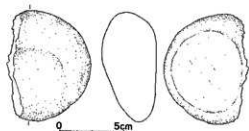
3号竪穴の南壁の中央に位置する竪穴である。10号竪穴の南西コーナーを残すのみであり、確認面から床面までは、約5cm前後である。規模、柱穴などは判然としない。竪穴には、長軸1.9m、短軸1.5m、確認面からの深さは約20cmの土坑が遺存している。

出土遺物(第36、37図)

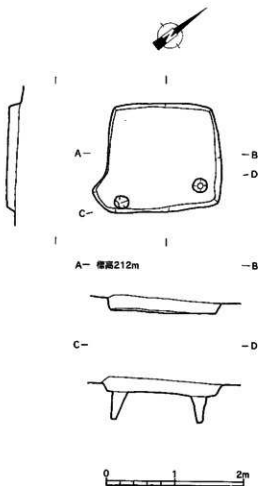
第36図は甕形土器の底部である。第37図は表面に研磨痕跡を残す磨石である。一部を欠損している。重さ317.4g。



第36図 中原舟久手遺跡10号竪穴出土土器実測図 (1/4)



第37図 中原舟久手遺跡10号竪穴出土石磨実測図 (1/3)



第38図 中原舟久手遺跡11号竪穴実測図 (1/60)

11号竪穴 (第38図)

2号竪穴と4号竪穴との間に位置する小型竪穴である。竪穴中央部での長軸は1.7m、短軸は1.6mの略正方形である。面積は2.7㎡である。確認面から床面までの深さは20cmである。柱穴は竪穴の東壁にある2本と推察できる。

出土遺物 (第39図)

甕形土器の胴部上半部の櫛描波状文である。



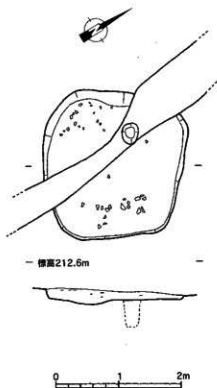
第39図 中原舟久手遺跡11号竪穴出土土器実測図 (1/4)

12号竪穴 (第40図)

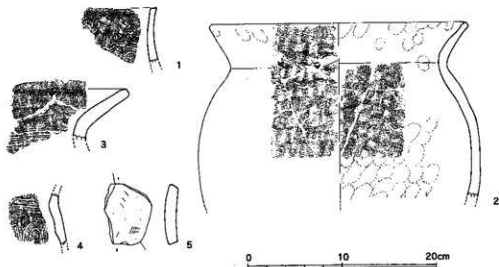
調査区の略中央部に位置する小型竪穴である。竪穴コーナーは丸みを持ち、長軸は2.4m、短軸は2.3mの略正方形である。面積は約5.5㎡である。確認面から床面までは約20cmである。柱穴は判然としない。竪穴には新しい溝が斜めに走っている。

出土遺物 (第41図)

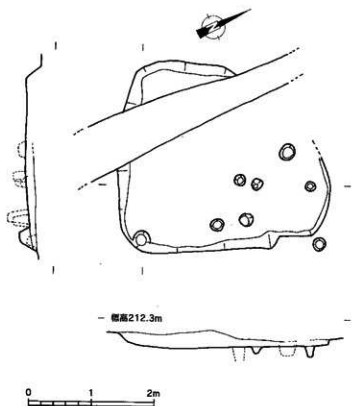
1は櫛描波状文を施した二重口縁部の甕である。2は粗製の甕である。口径27cmで表裏に指頭状の整形痕跡を残している。胴部の最大径は30cmである。3、4は甕形土器である。3の口縁部は外反し、頸部には櫛描波状文を横走させている。4は胴部上半部である。櫛描平行文や波状文を併用している。5は土器片加工品である。弧の部分が研磨調整されている。38.8g。



第40図 中原舟久手遺跡12号竪穴実測図 (1/60)



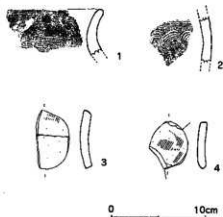
第41図 中原舟久手遺跡12号竪穴出土土器実測図 (1/4)



第42図 中原舟久手遺跡13号竪穴実測図 (1/60)

13号竪穴 (第42図)

調査区中央の北寄りに位置している。長軸3.4m、短軸3mの不定形を呈している。面積は約10.2㎡である。竪穴の北西隅部は定かではない。柱穴は幾つかあるが、この竪穴に伴うものかは判然としない。



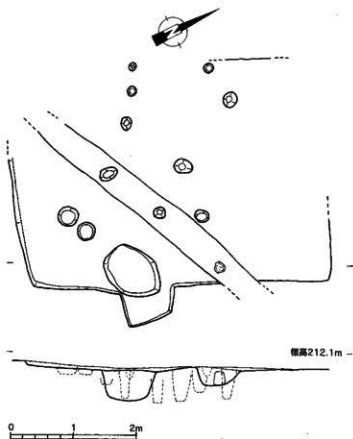
第43図 中原舟久手遺跡
13号竪穴出土土器実測図 (1/4)

出土遺物 (第43図)

1、2は甕形土器である。1の口縁部は外反し、頸部には櫛描波状文を横走させている。2は胴部上半部である。櫛描平行文や波状文を併用している。3、4は上器片加工品である。3は半月形を呈し、周縁部は良く研磨されている。22.6g。4は弧の部分が研磨調整されている。18.2g。

14号竪穴 (第44図)

調査区内の北側中央に所在している。長軸は5m、短軸は3.5mであり長方形を呈する。面積は17.5㎡を測る。確認面から床面までは10cm程度である。竪穴内には何本かの柱穴があるが、これに伴うものかどうかは判然としない。竪穴内を斜めに切る溝は後世のものである。



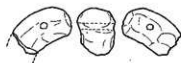
第44図 中原舟久手遺跡14号竪穴実測図 (1/60)

出土遺物(第45、46図)

第45図は甕形土器の胴部上半部であり、櫛描波状文を施している。第46図は土製勾玉の頭部である。撫ぜ調整され、紐通しの穴が開いている。



第45図 中原舟久手遺跡
14号竪穴出土土器実測図(1/4)



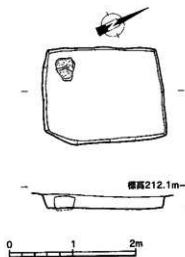
第46図 中原舟久手遺跡
14号竪穴出土遺物実測図(2/3)

15号竪穴(第47図)

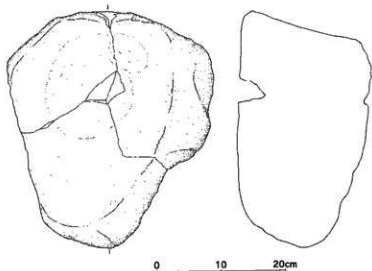
3号竪穴と14号竪穴の間に位置している小型竪穴である。長軸は1.9m、短軸は1.5mの略長方形を呈する。面積は2.9㎡である。確認面から床面までは20cmである。竪穴内には柱穴は確認されていない。竪穴の南西コーナーには、一抱えもある石皿・台石が遺存していた。

出土遺物(第48図)

石皿・台石は安山岩製の河原礫である。長さ37cm、幅32cm、厚さ20.5cmで、重さ29kgである。三つに割れている。表面には研磨を受けた範囲が心持窪んだ状態である。



第47図 中原舟久手遺跡
15号竪穴実測図(1/60)



第48図 中原舟久手遺跡15号竪穴出土土器実測図(1/6)

16号竪穴(第49図)

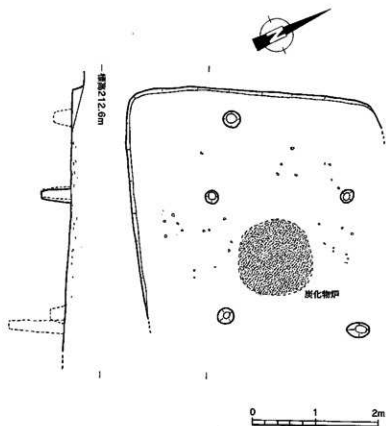
調査区中央のやや西部、9号竪穴と12号竪穴の間に位置している。竪穴は北西、南西のコーナーを残すのみで、大きく東の半分を欠損している。一辺は4.1mを測る。確認面から床面までは、約20cmを測る。主柱穴は4本であり、中央には炭化物が遺存している。

出土遺物(第50図)

1は櫛描波状文を施す二重口縁部の破片である。2~11は甕形土器の頸部から胴部上半部である。櫛描平行文や波状文を併用している。12は尖り底、13は丸底部である。

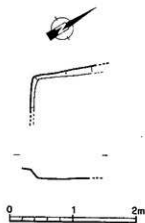
17号竪穴(第51図)

調査区の北端、E-2調査区の東壁で、竪穴の南西コーナーの一部が検出されている。しかしながら、竪穴の大半は路線地区外であり、調査はしていない。

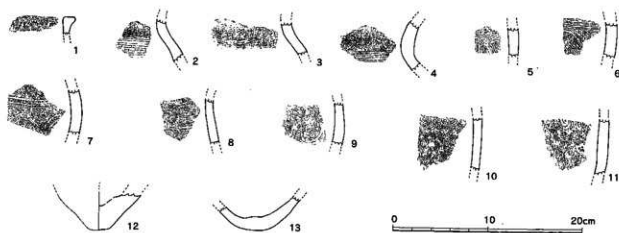


第49図 中原舟久手遺跡16号竪穴実測図 (1/60)

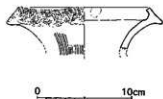
出土遺物 (第52、53図)
 第52図は壺形土器の二重口縁部である。低い口縁部には、横描波状文が施文されている。口径は14cmである。第53図は安山岩製の磨石である。表面部、側面部が研磨されている。砥石として使用されたのかもしれない。重さ237g。



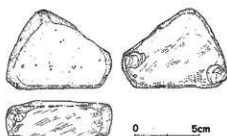
第51図 中原舟久手遺跡17号竪穴実測図 (1/60)



第50図 中原舟久手遺跡16号竪穴出土土器実測図 (1/4)



第52図 中原舟久手遺跡17号竪穴出土土器実測図 (1/4)



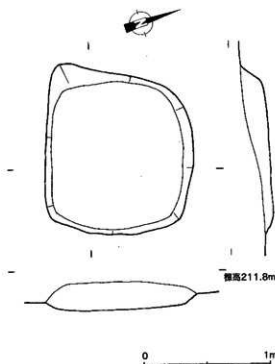
第53図 中原舟久手遺跡17号竪穴出土石器実測図 (1/3)

2. 土坑状遺構

土坑状遺構は13基確認しているが、1～3、12号土坑は、覆土に土器片を包含するもので機能・用途は判らない。一方、A・B・D-9調査区に分布している9基の土坑には土器片等の包含はなかった。その中でも、4、5、6、8、10、11号土坑の覆土は、褐色と黄褐色の混在する土であり、穴を掘った後に埋め戻した状態と推察された。これらは土坑墓の可能性が高い。

1号土坑 (第54図)

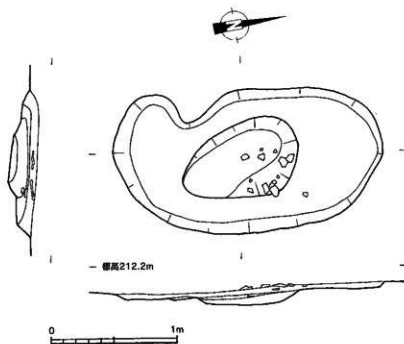
遺跡の調査区中央部、D-5調査区の南東にあり、2号竪穴の北側辺部と切り合う関係にある。長軸1.6m、短軸1.4mであり、確認面から床面までは16cmである。面積は、約2.2㎡である。土坑はやや胴張りの隅丸方形の形態である。用途・機能は不明である。土器の細片が包含されていた。



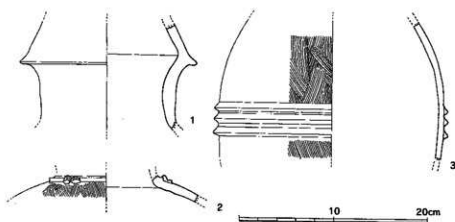
第54図 中原舟久手遺跡1号土坑実測図 (1/30)

2号土坑 (第55図)

遺跡の調査区中央部、D-5調査区の西中央にあり、2号竪穴と12号竪穴の間に位置している。土坑は長楕円形で、長軸2.2m、短軸1.2m、確認面から床面までは約5～15cmである。床面中央部には一段深い所がある。用途・機能は不明である。土坑内からは出土遺物が検出されている。



第55図 中原舟久手遺跡2号土坑実測図 (1/30)

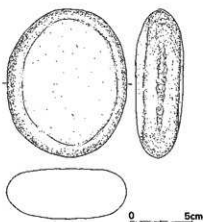


第56図 中原舟久手遺跡2号土坑出土土器実測図 (1/4)

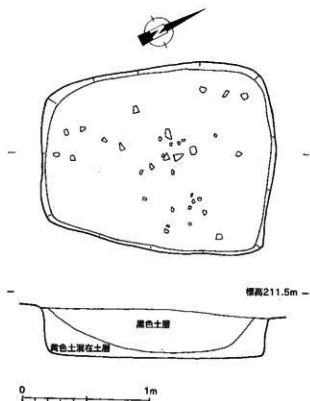
出土遺物 (第56、57図)

第56図は、壺形土器の破片である。1は二重口縁部であり、櫛描波状文はない。2は頸部の破片である。断面三角形の突帯に勾玉状の2個の貼り付け文が施文されている。3は壺形土器の胴部である。胴部最大径は24cmであり、三条の断面三角形の突帯が巡っている。

第57図は、磨石・敲石である。表裏面は磨石として使用され、側縁は敲石として利用されている。安山岩製の円礫であり、長軸11.5cm、短軸9.3cm、厚さ3.9cmで重さ648gである。



第57図 中原舟久手遺跡2号土坑出土土器実測図 (1/3)



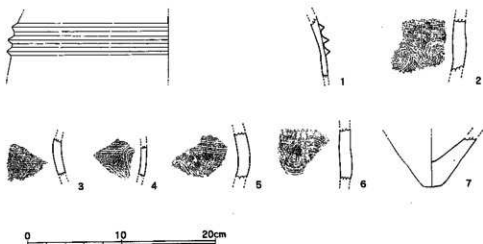
第58図 中原舟久手遺跡3号土坑実測図 (1/30)

3号土坑 (第58図)

D-6調査区の北側に位置し、2号竪穴の南側辺と切り合う土坑である。隅丸の長方形状を呈する。長軸は1.8m、短軸は1.1m~1.5mで、確認面から床面までは30~40cmを測る。覆土は、流れ込み状態を呈し、遺物を包含している。

出土遺物 (第59図)

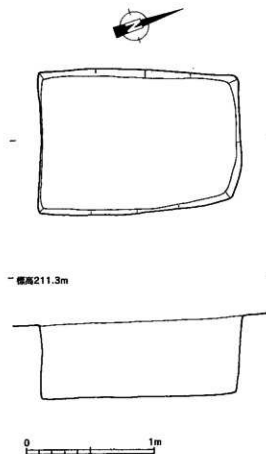
1は、壺形土器の胴部である。胴部最大径は34cmを測り、三条の断面三角形の突帯が巡っている。2~6は甕形土器の胴上半である。櫛描平行文や波状文を併用している。7は甕形土器の尖底部である。



第59図 中原舟久手遺跡3号土坑出土土器実測図(1/4)

4号土坑 (第60図)

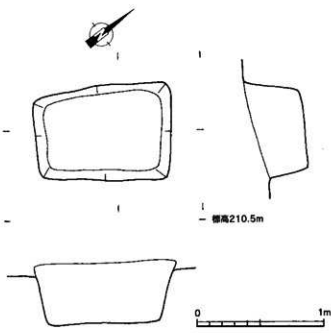
B-9調査区に位置している。長方形の土坑である。長軸は1.6m、短軸は1.2mで、確認面からの深さは約60cmである。覆土は褐色と黄褐色の混在する土であり、遺物等は皆無であった。穴を掘った後に、埋め戻した状態と推察された。土坑墓の可能性が高い。



第60図 中原舟久手遺跡4号土坑実測図(1/30)

5号土坑 (第61図)

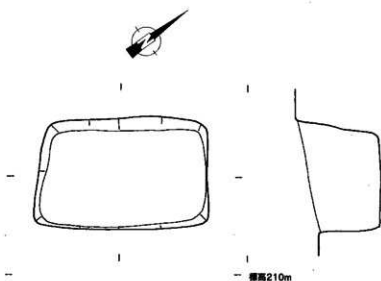
D-9調査区に位置している。長方形の土坑である。長軸は1.1m、短軸は0.8mで、確認面からの深さは約40cmである。覆土は褐色と黄褐色の混在する土であり、遺物等は皆無であった。穴を掘った後に、埋め戻した状態と推察された。土坑墓の可能性が高い。



第61図 中原舟久手遺跡5号土坑実測図(1/30)

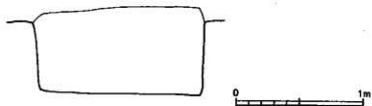
6号土坑 (第62図)

D-9調査区に位置している。長方形の土坑である。長軸は1.4m、短軸は0.9mで、確認面からの深さは約60cmである。覆土は褐色と黄褐色の混在する土であり、遺物等は皆無であった。穴を掘った後に、埋め戻した状態と推察された。土坑墓の可能性が高い。



7号土坑 (第63図)

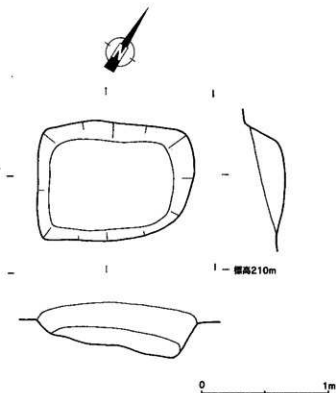
D-9調査区の6号竪穴と8号竪穴の間に位置している。略長方形の土坑である。長軸は1.3m、短軸は1mであり、確認面からの深さは約25cmである。覆土は黒褐色土であり、遺物等は皆無であった。



第62図 中原舟久手遺跡6号土坑実測図 (1/30)

8号土坑 (第64図)

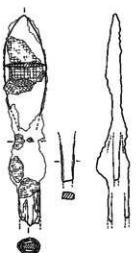
D-9調査区の7号土坑の隣に位置している。略長方形の土坑である。長軸は1.3m、短軸は0.8mで、確認面からの深さは約35~40cmである。覆土は褐色と黄褐色の混在する土壌であり、覆土の状態は、土坑を掘った後に、埋め戻された状態と推察された。床面の中央付近から鉄鍬が一点発見されている。土坑墓の副葬品の可能性が高い。



第63図 中原舟久手遺跡7号土坑実測図 (1/30)

出土遺物 (第65図)

鉄鏃は長さ6.5cm、最大幅1.7cm、先端身部の厚さは0.2cmの木葉形を呈する。中子は軸0.5cm、厚さ0.3cmで、基部には板皮が巻かれ、矢軸の直径は0.9cmで中空ある。鉄鏃先端部は布を巻いていたと推測され、布目痕跡が遺存している。重さ9.3g。



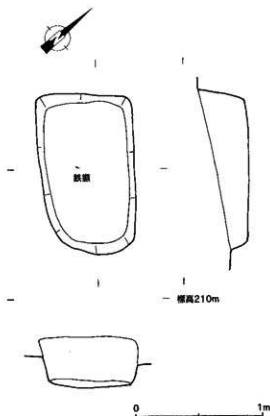
第65図 中原舟久手遺跡
8号土坑出土鉄鏃実測図 (2/3)

9号土坑 (第66図)

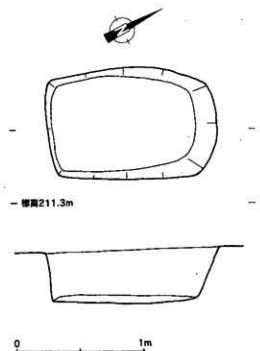
B-8・9調査区にまたがって発見されている。隅丸で略長方形の土坑である。長軸は1.35m、短軸は0.9mで、確認面からの深さは約40cmである。覆土は黒褐色土であり、遺物等は皆無であった。

10号土坑 (第67図)

A-9調査区に位置する長楕円形の土坑である。長軸は1.4m、短軸は0.7mで、確認面から床面までは約10cmである。覆土は褐色と黄褐色の混在する土壌であり、覆土の状態は、土坑を掘った後に、埋め戻された状態と推察された。遺物等は皆無であった。



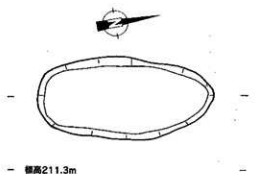
第64図 中原舟久手遺跡8号土坑実測図 (1/30)



第66図 中原舟久手遺跡9号土坑実測図 (1/30)

11号土坑 (第68図)

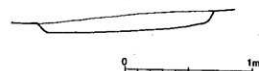
B-9調査区の南東部に位置している。隅丸長方形を呈し、長軸は1.4m、短軸は0.7mで、確認面から床面までは約16cmである。覆土は褐色と黄褐色の混在する土壌であり、覆土の状態は、土坑を掘った後に 埋め戻された状態と推察された。遺物等は皆無であった。



第67図 中原舟久手遺跡10号土坑実測図 (1/30)

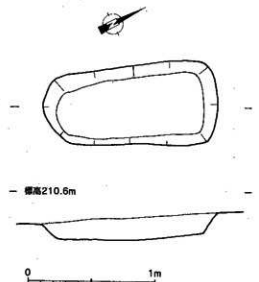
12号土坑 (第69図)

E-2・3調査区にまたがり、6号竪穴と切り合っている。形態は、隅丸で略方形の土坑である。長軸は1.4m、短軸は1.2mで、確認面からの深さは約20cmである。覆土は黒褐色土であり、遺物を少数含むものであった。

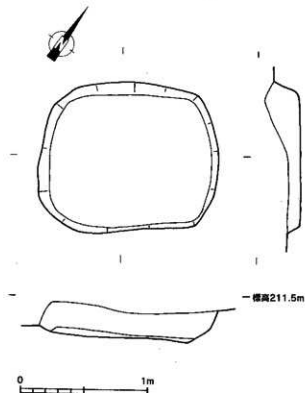


13号土坑 (第70図)

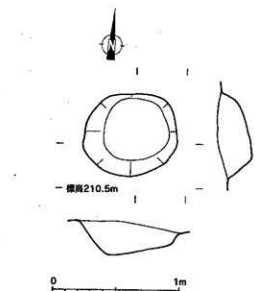
D-9調査区に位置している楕円形の土坑である。長軸75cm、短軸65cmで、深さ20~25cmである。遺物等は皆無であった。



第68図 中原舟久手遺跡11号土坑実測図 (1/30)



第69図 中原舟久手遺跡12号土坑実測図 (1/30)



第70図 中原舟久手遺跡13号土坑実測図 (1/30)

3. 溝状遺構

1号溝状遺構 (第71図)

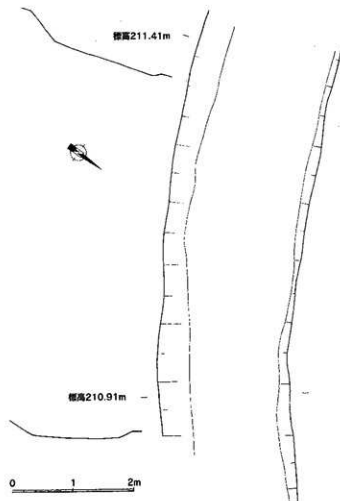
B・C-2調査区の標高210~211mの間に、浅いU字の溝状遺構が検出されている。溝状遺構は幅2~3mであり、確認面からの深さは10~40cmである。底部の幅は1~1.5mの浅いものである。確認できた溝の長さは約14mである。C・D-1調査区では地形が削平されており、溝状遺構は遺存してはいないが、標高210mの等高線沿いに周っているものと推察されている。

2号溝状遺構 (第72図)

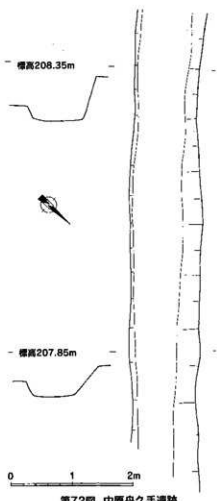
E-9・10、F-9調査区の標高207~208mの間に、逆台形状の溝状遺構が検出されている。溝状遺構は幅1.5mであり、確認面からの深さは20~70cmである。底部の幅は80cm前後の浅いものである。確認できた溝の長さは13mである。溝の延長線上を試掘してみると、C-10、G-8調査区で溝は遺存しており、確認全長は25mに至っている。調査区の東側は、段落ちになっており、この部分を検討すると、溝状遺構は集落跡を取り囲むように位置していると推察される。

3号溝状遺構

調査区の中央部を北・南に37m、これに略直行する西・東の30mを合わせて3号溝状遺構とする。この溝は、6号竪穴、12号竪穴、13号竪穴、14号竪穴、16号竪穴を切る関係にあり、溝の覆土を考慮すると、近世~近代の所産と推察される。特に、西・東の30mの溝は、西側の山林の中まで続いていることが表面的にも観察できることから、土地の境を形成する、根きり溝の可能性は高い。



第71図 中原舟久手遺跡1号溝状遺構実測図 (1/60)



第72図 中原舟久手遺跡2号溝状遺構実測図 (1/60)

4. 掘立柱遺構

1号掘立柱遺構 (第73図)

B-8調査区で、一間×一間の掘立柱建物遺構が検出されている。長軸2.8m、短軸1.7mを測る長方形のプランである。長軸の方位はN40° Eである。

2号掘立柱遺構 (第74図)

C-8調査区で、一間×一間の掘立柱建物遺構が検出されている。一辺は2.6mの略正方形を呈する。軸の方位はN33° Eである。

3号掘立柱遺構 (第75図)

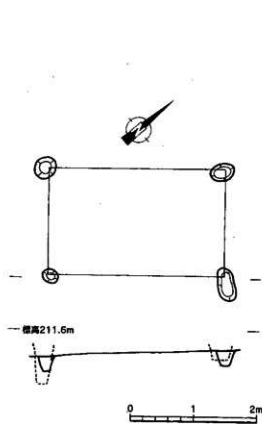
C-7調査区で、一間×一間の掘立柱建物遺構が検出されている。長軸2.2m、短軸1.8mの長方形である。長軸の方位はN28° Eである。

4号掘立柱遺構 (第76図)

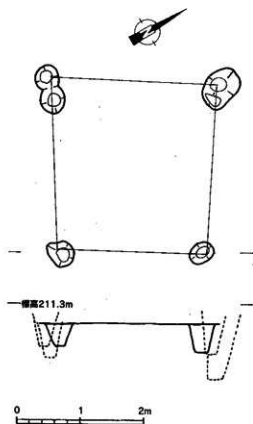
C-7調査区で、一間×一間の掘立柱建物遺構が検出されている。長軸2.7m、短軸2.1mの長方形である。長軸の方位はN28° Eである。

5号掘立柱遺構 (第76図)

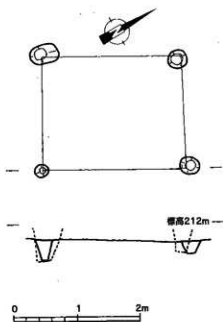
C-7調査区で、一間×一間の掘立柱建物遺構が検出されている。長軸2.3m、短軸1.8mの長方形である。長軸の方位はN9° Eである



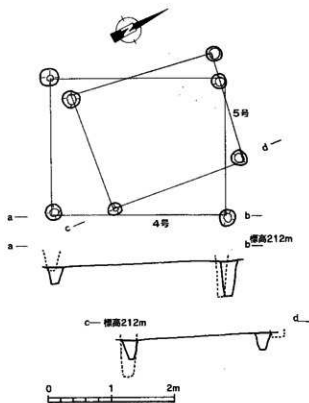
第73図 中原舟久手遺跡1号掘立柱遺構実測図 (1/60)



第74図 中原舟久手遺跡2号掘立柱遺構実測図 (1/60)



第75図 中原舟久手遺跡3号竪立柱遺構実測図 (1/60)



第76図 中原舟久手遺跡4・5号竪立柱遺構実測図 (1/60)

5. 表面採集遺物

旧石器時代の遺物 (第77、78図)

第77図1～5は流紋岩製の石器である。1は主要剥離面側から両側辺にプランティング加工を加え、心持ち基部を形成している。三稜尖頭器の基部付近の破片かもしれない。2は小型の縦長剥片である。両側辺は鋭利なエッジ状を呈し、部分的には使用痕と推察できる刃毀れがある。3、4は縦長剥片である。4の側辺には主要剥離面側への細かなリタッチ調整痕を残している。5はラウンドスクレイパーである。重さ55.1g。

第78図1はサヌカイト製の剥片である。2は流紋岩製の削器である。主要剥離面側から細かなリタッチ調整痕を施している。重さ40.8g。3はホルンフェルス製の剥片、4、5は流紋岩である。いずれも、表皮を残しているが、5は両側辺にリタッチ調整痕を施している。

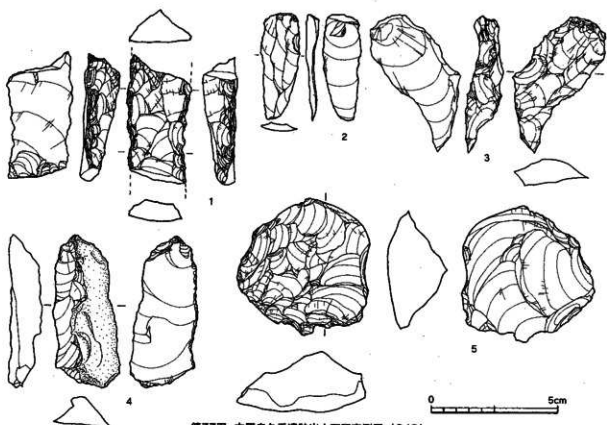
縄文・弥生時代の遺物 (第79、80、81、82図)

第79図は縄文時代の土器である。1は4号竪穴出土の刻目突帯文を施す甕形土器である。

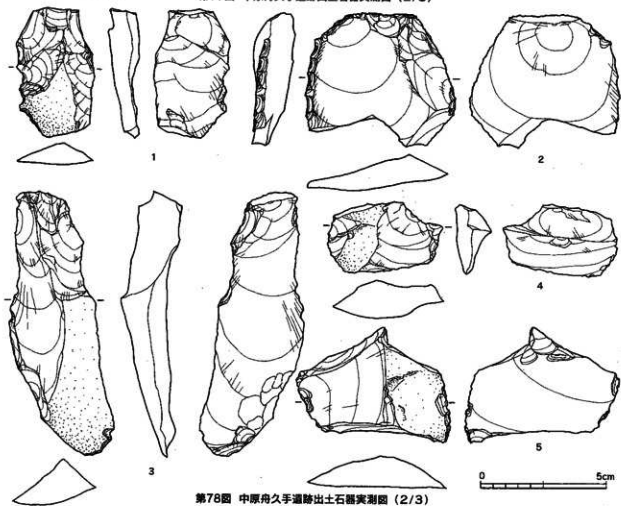
2～4は7号竪穴出土の西平・三万田系土器である。2は三本沈線に磨消縄文を施文する深鉢形土器の口縁部である。3は球形に誇張された胴部上半部に磨消縄文を施文している。4は上げ底の底部である。

5～12は8号竪穴出土の西平・三万田系土器である。5～8は深鉢形土器の口縁部であり、5・6は三本沈線、7・8は二本沈線に磨消縄文を施文している。9～12は胴部である。球形に誇張された9・10・12の胴部上半部に磨消縄文を施文している。

13～19は9号竪穴出土の縄文土器である。13～16は西平・三万田系土器であり、13は三本沈線に磨消縄文を施す深鉢形土器の口縁部である。14、15は胴部上半部の磨消縄文土器である。16は斜めに大きく開く波状口縁部である。表裏ともヘラ研磨され、内面に一条の沈線が巡る。17・18は縄文土器である。17は粗い縦縄文である。19は晩期の深鉢形土器の口縁部である。



第77圖 中原向久手遺跡出土石器実測圖 (2/3)

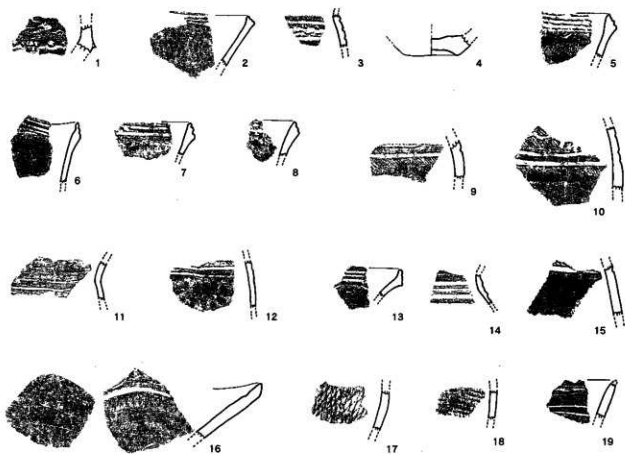


第78圖 中原向久手遺跡出土石器実測圖 (2/3)

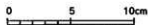
第80図1～3は円形及び略半円形の土器片加工品である。加工品の長軸は1.2～2.4cm、短軸は1.6～2.1cmを測る小型なものである。4は深鉢形土器である。口径は28cm、胴部最大径は25cmを測る。粗製であるが、表裏面はヘラの磨きが部分的に認められる。

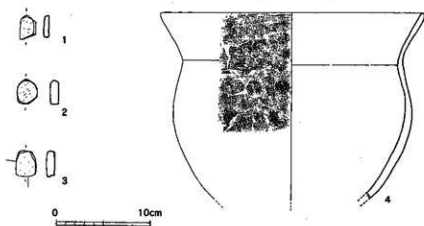
第81図1、2は結晶片岩製の磨製石鏃である。両方とも先端部及び基部は欠損している。1の幅は1.3cm、2の幅は1.7cmで厚さは両方共0.4cmである。1は2g、2は4.2g。3はサヌカイト製、4は姫島産黒曜石製の剥片石鏃である。先端部は駒形に加工されている。3は基部を欠損するが、最大幅1.4cm、重さ1.7gである。4は片脚で全長3.3cm、最大幅2.1cm、重さ1.7gである。5は刃部を大きく欠損した蛇紋岩製の磨製石斧である。表裏に研磨痕跡を残している。全長10.5cm、最大幅5.1cm、重さ176.3g。6は白色粒を包含する黒色黒曜石製の削器である。小国産黒曜石であろう。9号竪穴出土で重さ6.3g。7は周縁を加工したスクレイパーである。石材はチャートで重さ10.5g。8もチャート製の削器である。6号の竪穴出土で重さ16.9g。

第82図は扁平打製石斧、横刃形石器の一群である。1～4は安山岩製、5は結晶片岩製の扁平打製石斧である。1、5は刃部のみ、2は基部のみの破片である。1は42.3g、2は60.7g、5は42g。3は体部のみで、基部、刃部ともに大きく欠損している。重さ151.8g。4は基部を欠損しているが、比較的残りの良い扁平打製石斧である。重さ172.4g。安山岩製は表裏に自然面を残す一群が多い。6は刃部の角度から推測して、扁平打製石斧より、横刃形石器としての機能が考えられる。安山岩製。重さ57.9g。7は半月形を呈する横刃形石器である。刃部は細かなりタッチ調整がある。安山岩製。重さ27.8g。

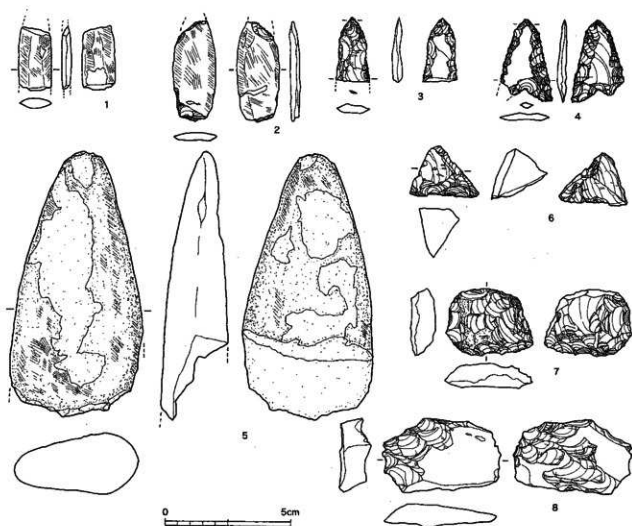


第79図 中津舟久手遺跡出土の縄文土器実測図(1/3)

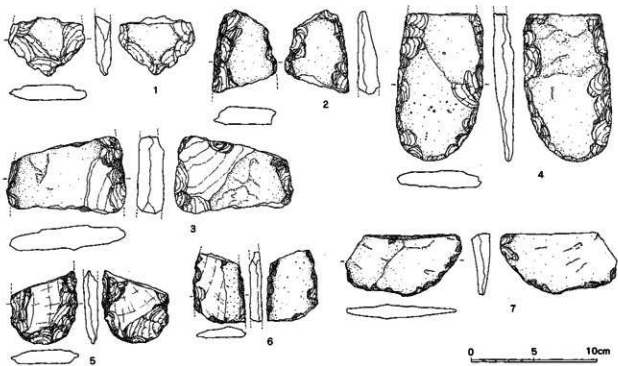




第80图 中原舟久手遺跡出土土器等実測图 (1/3)



第81图 中原舟久手遺跡出土石器実測图 (2/3)



第82圖 中順舟久手遺跡出土石器實測圖 (1/3)

第2表 竪穴遺構一覧表

竪穴番号	平面形	長軸×短軸 m	面積 (㎡)	主柱・支柱 (本)	焼土・炭化物	土坑	方位	備考
1 a	略長方形	6.4×6	38.4	3+2+3			N23° E	焼失
1 b	略長方形	4.8×4.2	20.2	4	○		N23° E	
2		6.6×		3+α			N19° E	焼失
3		6.8×					N19° E	
4 a	略長方形	6.4×6	38.4				N35° E	
4 b	略長方形	5 ×4.6	23		○		N35° E	
4 c	略長方形	3.6×3.2	11.5		○ ○			
5	略長方形	4.2×3.2	13.4	2			N26° E	
6 a	長方形	2.7×1.8	4.9		○		N 4° E	
6 b	略長方形	6.1×5.6	34.2	8+2	○			
7 a	長方形	4.4×3.5	15.4	4+2	○		N35° E	
7 b	長方形	6 ×5.5	33	6	○			焼失
8	長方形	5.7×4.8	27.4	4+2	○ ○		N37° E	
9	略長方形	7.3×6.9	50.4	8	○	○	N29° E	
10				2	○ ○			
11	略正方形	1.7×1.6	2.7				N41° E	
12	略正方形	2.4×2.3	5.5				N31° E	
13	不定形	3.4×3	10.2				N26° E	
14	長方形	5 ×3.5	17.5				N26° E	
15	略長方形	1.9×1.5	2.9				N25° E	
16		4.1×					N26° E	
17								

第3表 土坑遺構一覧表

番号	平面形	長軸×短軸 m	面積 (㎡)	深さ (cm)	方位	備考
1	隅丸正方形	1.6 ×1.4	2.2	16	N111° E	
2	歪な楕円形	2.15×1.15	2.0	5~15	N 10° E	
3	歪な長方形	1.85×1.5	2.8	30~40	N 26° E	
4	長方形	1.6 ×1.15	1.8	60	N 18° E	
5	長方形	1.1 ×0.8	0.9	40	N 36° E	
6	長方形	1.35×0.9	1.2	60	N 37° E	
7	略長方形	1.25×0.95	1.2	25	N 57° E	
8	略長方形	1.25×0.75	0.9	35~40	N130° E	鉄鏝
9	略長方形	1.35×0.9	1.2	40	N 27° E	
10	長楕円形	1.4 ×0.65	0.9	10	N 9° E	
11	隅丸長方形	1.4 ×0.65	0.9	16	N 27° E	
12	隅丸略正方形	1.4 ×1.2	1.7	20	N 54° E	
13	楕円形	0.75×0.65	0.5	20~25	N 85° E	

第5章 まとめと考察

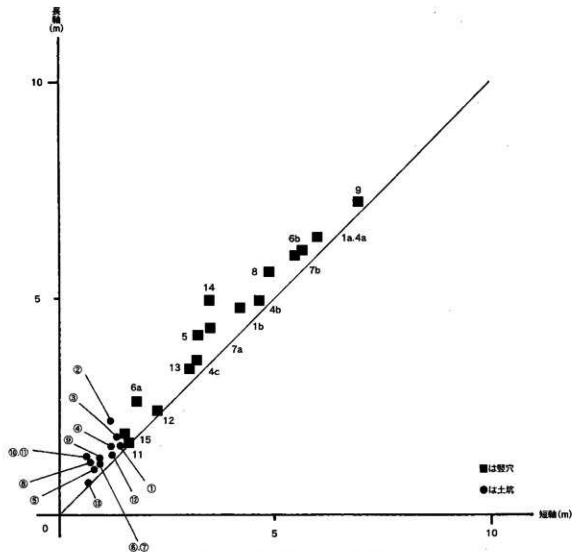
中原舟久手遺跡は、田代川左岸の標高約210mの丘陵上に位置している。この丘陵は、北東部の一箇所を除いて、周辺を浅い谷が巡る独立丘陵状を呈している。調査区は丘陵の東側部分であり、その範囲は、北・南に約90m、西・東に約35mで、約3,000㎡の面積である。調査区の北端と南端には溝状遺構が確認されており、これが丘陵の縁辺部と重なることから、集落の範囲を画する溝状遺構の一部と推察された。いわゆる、環濠集落である。

調査区内で確認された遺構は、22基の竪穴、13基の土坑、5基の掘立柱建物遺構、4本の溝状遺構、柱穴多数である。つまり、環濠内のこれら遺構の分布をみると、環濠に沿って、内側10m前後は、遺構の分布は認められず、環濠との距離を意図的に保って、集落配置がなされている状態が把握できた。

出土遺物としては、旧石器時代の石器類、縄文後晩期の土器・石器類、弥生後期後半～終末前後の土器・石器・鉄器類等である。この内、上記の遺構に伴出する遺物は、ほとんど全てが、弥生後期後半～終末前後の遺物であり、この時期が、中原舟久手遺跡の主体となる時期と考えてよい。

竪穴の規模と時期

中原舟久手遺跡の集落を構成する22基の竪穴の内、規模の測れる17基の竪穴を、各々の大ききで分類すると、第83、84図ようになる。第83図は竪穴の長軸と短軸との割合を比較したものである。



第83図 中原舟久手遺跡の竪穴と土坑の規模

堅穴は、小型堅穴（6号a、11号、12号、15号）、中型堅穴（1号a、1号b、4号a、4号b、4号c、5号、6号b、7号a、7号b、8号、13号、14号）、大型堅穴（9号）に三分割できる。

またこれを、84図のように堅穴面積で比較すると、小型堅穴は10㎡以下、中型堅穴は10～30㎡と、30～40㎡とに二分できる。大型堅穴は50㎡以上である。

中原舟久手遺跡の場合、堅穴の大きさやその付属施設で用途・機能の分類は不可能であったが、炭化物が大型堅穴・中型堅穴には普遍的であり、小型堅穴には少ないと言えそうである。また、焼土や不定形土坑が大野川中・下流域の遺跡に比べ、全般的に少ないのも上・中流域に位置する当遺跡の特徴である⁽⁸¹⁾。

堅穴の柱穴は8本、6本、4本等、大きさに寄ってバリエーションに富むが、柱穴の底部には、いづれも白色粘土を敷いていた。主柱の耐久性を考慮した措置であろう。

さて、土器形式の変遷過程と、堅穴住居の立て替え過程とは、次元を異にする現象であることは言うまでもない。中原舟久手遺跡は、限られた空間で、家屋の立て替えがあり、建物の推移を指摘できる。

例えば、旧→新をピックアップすると、1号b→1号a、4号b→4号a→4号c、7号b→7号a、6号b→6号aである。しかし、堅穴出土の遺物は僅少であり、遺構の切り合い関係から土器形式の変遷を考察するには至っていない。

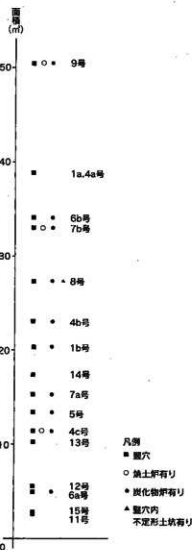
但し、壺形土器は、やや古手に当る17号堅穴出土土器を除いて、櫛描波状文を施し、口縁部高と頸部高がほぼ1対1の長く伸びた二重口縁部であり、頸部に一条、唇部に三条の断面三角形の突帯文を施文するものである。また、これに伴出する壺形土器は、口縁部が緩く外反し、頸部から胴部上半にかけて櫛描波状文を平行・波状に施文する一群が主体となる土器と考えても大過ない。これ等は、「大野原の遺跡」で編年された、二本木・松木Ⅲ期⁽⁸²⁾に相当し、弥生後期後半～終末前後の遺物であり、この時期が、中原舟久手遺跡の主体となる時期と考えてよい。

土坑の用途・機能

中原舟久手遺跡の集落を構成する13基の土坑を、長軸と短軸との割合で比較すると第83図ようになる。この内、比較的大型に属する1号、2号、3号、12号土坑の位置は堅穴の分布域内にあり、土坑の覆土には土器片が包含されていた。この4基の土坑は用途・機能不明なものである。

一方、堅穴の分布するA～F-3～7調査区より、十数メートルの間隔を空けて、土坑が複数分布するA～D-9調査区がある。これは、A・B-9調査区の4基と、D-9調査区の5基とに二分できる。

土坑は、4号、5号、6号、8号、10号、11号で確認できたように、覆土は黄褐色土と黒褐色土が混じり合ったもので、流れ込みの状況や土器等の包含はなかった。つまり、一度掘り上げた土を、再び埋め戻した様相が顕著であり、その形態や規模から土坑墓と推察された。その上、8号土坑の床面には、副葬品と考えられる鉄鏝が供えられていた。



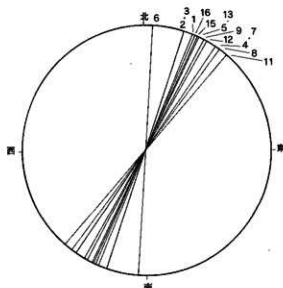
第84図 中原舟久手遺跡の堅穴面積と付属施設

このことから、竪穴住居跡群とやや間隔を置いて、当時の墓域が構築されていた様相が推量された。

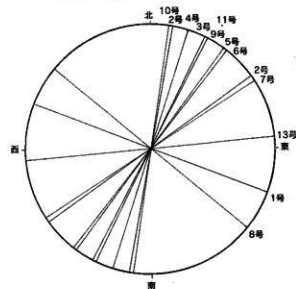
さて、竪穴住居跡群と墓域の間をみると、そこは何もない更地ではなく、纏まらない柱穴群が遺存していることが判る。千歳村鹿道原遺跡⁽²³⁾で指摘したような一間×一間の倉庫群か、モガリに因する遺構等、その機能・用途は推測の域を出ないが、竪穴の削平された柱穴群のみではないことは現地の状況から判断できる。この様な遺構は三重町の陣箱遺跡、野津町の日当遺跡、下藤遺跡、千歳村の高添遺跡⁽²⁴⁾でも認められる。

大野川の上・中流域沿いに展開する広大な火山灰台地は、弥生後期後半～古墳時代初期の集落跡が濃密に分布する地帯である。この一帯は、昭和40年代後半から圃場整備事業や土地改良事業に伴う発掘調査が実施されてきたが、当該期の集落跡に伴う明瞭な墓地は、発掘調査された類型に乏しく、集落のみで墓地がないという、奇異な現象として印象付けられてきた。それは一次には、限られた予算と日程のなかで、広大な集落の中心部のみを発掘調査するという、調査法そのものに起因するものであったものと推察できなくもない。

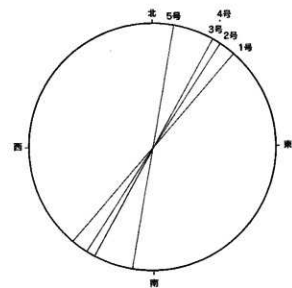
現在、大野川上・中流域の遺跡で、発掘調査された弥生後期後半～古墳時代初期の竪穴住居跡の総数は千数百基に及ぶと推察されるが、これに比較して、当該期の墓地の数は十指に満たないのが現実である。この現象は前記した独立柱の建物群に関しても同様である。仮に、竪穴住居跡のみを追いかけるという、木をみて、森をみなかつた過去の調査法そのものに問題点があったと仮定した場合には、逆に次のような問題点を提示することができる。つまり、弥生～古墳時代の集落には場の機能が明確に存在していたということである。このことは、当り前のことのようにであるが、当時の集落構造、特に場の機能を把握するうえで見過し難いのである。さて大野川上・中流域



第85図 中原舟久手遺跡の竪穴長軸方位



第86図 中原舟久手遺跡の土坑長軸方位



第87図 中原舟久手遺跡の独立柱遺構長軸方位

にある当該期の遺跡の内、発掘調査報告書の平面図から墓地の可能性のありそうな遺構をピックアップしてみると、千歳村上原遺跡^(註5)の住居跡内土坑3基、竹田市上菅生B遺跡^(註6)で碧玉製管玉を副葬した土坑1基+土坑17基、竹田市板井尾遺跡^(註7)の土坑群22基、小園遺跡A地区の小型竪穴3基、楠野遺跡C地区^(註8)の土坑2基等の僅少例を上げることができる。

墓地遺構が希薄である現状は動かし難い事実であるが、中原舟久手遺跡の竪穴住居跡群と土坑墓群との配置関係を見ると、竹田市板井尾遺跡のそれと共通点を指摘できるのである。つまり、北側に分布する竪穴住居跡群と南側の土坑墓群との間は、約十メートル前後の柱穴のみの空間域を形成している点である。これを、土坑墓群を視点にして俯瞰すると、環濠集落の中原舟久手遺跡では、集落の南側から、環濠→空間→土坑墓群→柱穴群（掘立柱の建物群）と空間→竪穴住居跡群→空間→環濠となる。一方、板井尾遺跡では、土坑墓群を円の中心と仮定すると、同心円の中心から外側へ向かって、土坑墓群→柱穴群（掘立柱の建物群）と空間→竪穴住居跡群と配置されている様相として把握できそうである。つまり、両遺跡の共通性を捉えると「土坑墓群→柱穴群（掘立柱の建物群）と空間→竪穴住居跡群」という場の選地を指摘できそうである。

註

- (註1) 栗田勝弘「舞田原遺跡における竪穴の機能分化と分布」「竪穴遺構内に遺存する不定形土坑の機能について」『舞田原』犬飼町教育委員会1985
- (註2) 羽田野光洋「二本木・松木遺跡を中心とした出土土器の編年(案)」『大野原の遺跡』大野町教育委員会1980
- (註3) 栗田勝弘「千歳村鹿道原遺跡の調査」発表要旨『九州考古学66』九州考古学会1990
- (註4) 栗田勝弘編『陣箱遺跡』三重町教育委員会1987
 牧尾義樹編『日当遺跡』大分県文化財調査報告第58輯 大分県教育委員会1982
 高橋信武編『下藤遺跡』野津川流域の遺跡V 野津町教育委員会1984
 坂本嘉弘編『高添遺跡』千歳村教育委員会1988
- (註5) 栗田勝弘「竪穴付翼施設の機能と住居の移動・移転」『上原遺跡』千歳村教育委員会1989
- (註6) 高橋徹「上菅生B遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡XI』竹田市教育委員会1986
- (註7) 小林昭彦「板井尾遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡XI』竹田市教育委員会1987
- (註8) 坂本嘉弘・牧尾義樹編『菅生台地と周辺の遺跡X』竹田市教育委員会1985

付章 土坑等に関する自然科学調査

大野原台地に位置する中原舟久手遺跡の発掘調査では、弥生時代後期後半～終末前後の竪穴住居や土坑が検出されている。土坑の性格としては埋葬施設の可能性が考えられている。また、竪穴住居内で認められた不定形土坑は陶器を埋葬した施設の可能性が考えられている。そこで、今回は、各遺構内にヒトを含む動物遺体が埋納されていたかを検証することを目的として、リン分析と脂肪酸分析を実施する。なお、本時期の遺構の検出例は、本遺跡が位置する大野川流域では少なく、今回の調査は本地域の人間の活動を捉える上でも意義がある。

1. 試料

調査は、土坑4基（4・5・6・8号土坑）、8号竪穴住居の不定形土坑1基である。土坑のうち、4号・5号・6号土坑は平面形が長方形、8号土坑は略長方形を呈する。いずれも、底面は平坦であり、壁面は垂直である。また、8号竪穴住居内の不定形土坑は住居壁際に構築されており、単一の堆積物によって埋め戻されている。

試料は、土坑および不定形土坑のいずれも、土坑底面土壌（試料番号A）、土坑覆土（試料番号B）、遺構構築されている地山上面（試料番号C）の3箇所から試料が採取された。採取試料のうち、リン分析は4・5・6・8号土坑4基の12点、脂肪酸分析は8号土坑と8号竪穴住居の不定形土坑の6点について実施する。

2. 分析方法

(1) リン分析

測定は、土壤養分測定法委員会（1981）を参考に、硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法で行った（土壤養分測定法委員会, 1981）。以下に、各項目の操作工程を示す。

試料を風乾した後で軽く粉砕し、2.00mmメッシュの篩に通し、風乾細土試料とする。この水分量を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷した後、過塩素酸約10mlを加えて、再び加熱分解する。分解が終了した後、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取してリン酸発色液を加え、分光光度計によりリン酸（P2O5）濃度を測定する。この測定値と水分量から乾土あたりのリン酸含量（P2O5mg/g）を求める。

(2) 脂肪酸分析

脂肪酸分析定法（坂井ほか, 1996）に基づき、脂肪酸の抽出後、クロマトグラフィーで測定し、測定データを解析する。

3. 結果

(1) リン分析

結果を第4表に示す。分析試料の土性は、いずれもやや粘質のあるシルト質粘土に区別される。土色は、やや黒味のかかった暗褐色～黒褐色からなり、4号土坑の地山土壌と5号土坑の底部直下土壌では褐色が強い。

リン酸含量は、各試料ともに1.0～2.0P2O5mg/gの含量範囲にあり、特異的に高い含量を示す試料は認められない。

第4表 各土坑のリン分析結果

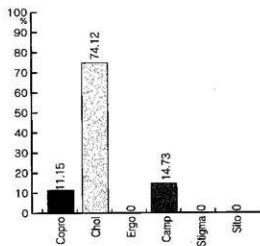
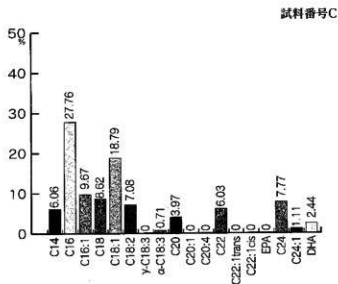
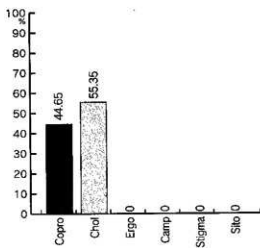
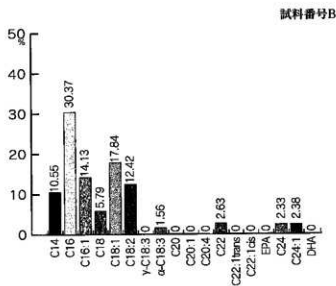
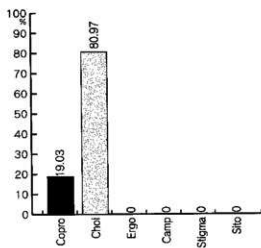
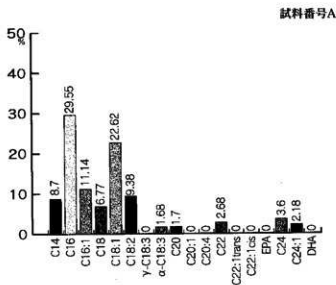
試料名		土性	土色	P2O5(mg/g)
4号土坑	A (土坑底部の直下土壌)	SiC	2.5Y3/1 黒褐	1.35
	B (土坑内覆土)	SiC	10YR3/3 暗褐	1.21
	C (土坑付近の地山)	SiC	10YR4/4 褐	1.18
5号土坑	A (土坑底部の直下土壌)	SiC	10YR4/4 褐	1.33
	B (土坑内覆土)	SiC	10YR2/3 黒褐	1.68
	C (土坑付近の地山)	SiC	10YR3/3 暗褐	1.26
6号土坑	A (土坑底部の直下土壌)	SiC	10YR3/4 暗褐	1.15
	B (土坑内覆土)	SiC	10YR3/3 暗褐	1.25
	C (土坑付近の地山)	SiC	10YR3/4 暗褐	1.06
8号土坑	A (土坑底部の直下土壌)	SiC	10YR3/2 黒褐	1.92
	B (土坑内覆土)	SiC	10YR3/1 黒褐	1.80
	C (土坑付近の地山)	SiC	10YR3/2 黒褐	1.34

土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖 (農林省農林水産技術会議監修, 1967) による。
土性:土壌調査ハンドブック (ペドロジスト懇談会編, 1984) の野上土性による。

SiC:シルト質壤土 (粘土25~45%, シルト45~75%, 砂0~30%)

第5表 脂肪酸分析結果

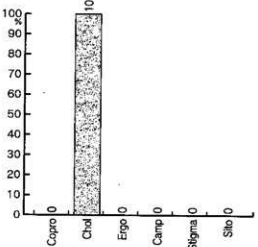
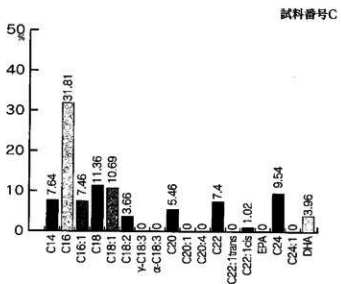
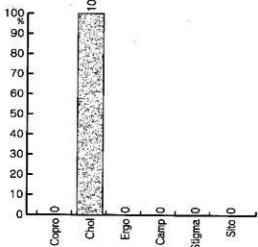
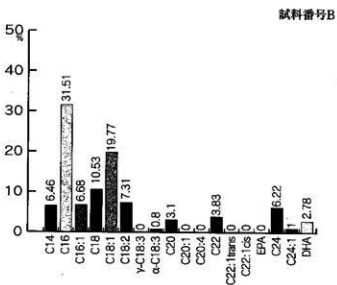
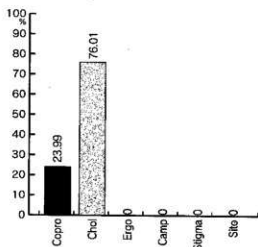
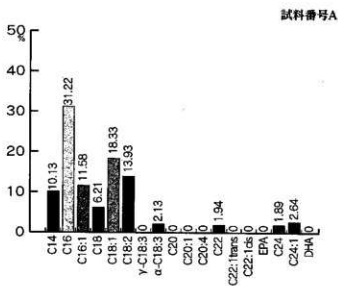
	8号土坑			8号整穴内不定形土坑		
	A	B	C	A	B	C
脂肪酸組成						
C14	8.70	10.55	6.06	10.13	6.46	7.64
C16	29.55	30.37	27.76	31.22	31.51	31.81
C16:1	11.14	14.13	9.67	11.58	6.68	7.46
C18	6.77	5.79	8.62	6.21	10.53	11.36
C18:1	22.62	17.84	18.79	18.33	19.77	10.69
C18:2	9.38	12.42	7.08	13.93	7.31	3.66
γ-C18:3	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
α-C18:3	1.68	1.56	0.71	2.13	0.80	0.00
C20	1.70	0.00	3.97	0.00	3.10	5.46
C20:1	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
C20:4	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
C22	2.68	2.63	6.03	1.94	3.83	7.40
C22:1trans	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
C22:1cis	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.02
EPA	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
C24	3.60	2.33	7.77	1.89	6.22	9.54
C24:1	2.18	2.38	1.11	2.64	1.00	0.00
DHA	0.00	0.00	2.44	0.00	2.78	3.96
合計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
ステロール組成						
Copro	19.03	44.65	11.15	23.99	0.00	0.00
Chol	80.97	55.35	74.12	76.01	100.00	100.00
Ergo	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
Camp	0.00	0.00	14.73	0.00	0.00	0.00
Stigma	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
Sito	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
合計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00



脂肪酸組成

コレステロール組成

第88図 8号土坑の脂肪酸分析結果



脂肪酸組成

コレステロール組成

第89図 8号型六住居内の不定形土坑の脂肪酸分析結果

(2) 脂肪酸分析

結果を第5表、第88、89図に示す。8号土坑および8号堅穴内不定形土坑の各試料の残留脂肪酸組成およびステロール組成は、いずれも類似した組成を示した。脂肪酸組成では、C16 (パルミチン酸)、C18:1 (オレイン酸)、C18:2 (リノール酸) などが占める割合が大きい。ステロール組成では、コレステロールが全試料から検出された。8号土坑では、コプロスタノールが検出された。

4. 考察

今回の調査では、土坑4基、堅穴住居跡内の不定形土坑1基について、リン分析と脂肪酸分析を実施した。4号土坑・5号土坑・6号土坑・8号土坑から採取された土壌試料は、いずれもやや粘質のある土壌からなり、理化学成分が保持されやすいと判断される土壌であった。

現在の土壌中に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量は、Bowen (1983)、Bolt・Bruggenwert (1980)、川崎ほか (1991)、天野ほか (1991) に基づくと、約3.0P2O5 mg/g程度と推定される。人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は5.5P2O5 mg/gとの報告もある (川崎ほか、1991)。したがって、これらの値を著しく越える土壌では、外的要因 (おそらく人為的影響によるもの) によるリン酸成分の富化が指摘できる。

今回調査を実施した4号・5号・6号・8号土坑のリン酸分析結果はいずれも類似しており、1.0~2.0P2O5 mg/gの含量値を示した。この値は上記した天然賦存量の範囲内にあることから、リン酸が富化されているとはいえ、ヒトを含む動物遺体由来する成分が残留しているとは考えにくい。ただし、いずれの土坑も土坑底部の直下土壌 (試料A) と土坑内覆土 (試料B) のリン酸含量値が、遺構が構築されている土坑付近の地山 (試料C) の含量値に比較して高くなっている傾向が読みとれる。この傾向が、どの程度の意味を持つか判断がつかないが、土壌中の成分が経年変化の過程で溶脱することが十分に予測されることから、相対的評価としてみた場合、土坑内にはリン酸が富化されており、動物・植物遺体が埋設されていた可能性を考える必要がある。

これらの土坑のうち、8号土坑は脂肪酸分析も実施しており、その結果では土坑底部の直下土壌 (試料A) と土坑内覆土 (試料B) からは動物性のステロールであるコレステロール、および腸内細菌などに起因するコプロスタノールが確認された。このことと、先に述べたリン分析の結果を見る限り、土坑内には動物遺体が存在した可能性が考えられる。ただし、土坑付近の地山堆積物からも両ステロールが確認されたことから、土坑内に限った成分の残留ではない可能性もあり、特定することはできない。

8号堅穴住居跡内の不定形土坑でも、土坑底部の直下土壌 (試料A) と土坑内覆土 (試料B) から動物性のステロールが検出されており、土坑が掘込まれている土坑付近の地山 (試料C) から検出されている。本土坑は住居内に構築されており、地山堆積物は床面に相当することから、床面には人間の活動の影響が及んでおり、脂肪酸が残留している可能性がある。そうだとすれば、不定形土坑には動物性の遺体が存在した可能性が考えられる。

以上、土坑の性格について、リン分析・脂肪酸分析結果から検討したが、いずれの土坑も遺体埋葬の用途を特定する結果とはならなかったが、その可能性がある結果となった。今後、この点については、考古学的な調査成果と併せて評価するようにしたい。

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen, H.J.M. (1983) 環境無機化学 - 元素の循環と生化学 -。浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社。 [Bowen, H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements] .
- Bolt, G.H.・Bruggenwert, M.G.M. (1980) 土壌の化学。岩田進午・三輪審太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 学会出版センター [Bolt, G.H. and Bruggenwert, M.G.M. (1976) SOIL CHEMISTRY], p.235-236.
- 土壌標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壌標準分析・測定法。354p., 博友社。
- 土壌養分測定法委員会編 (1981) 土壌養分分析法。440p., 養賢堂。
- 川崎 弘・吉田 澤・井上恒久 (1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 第1巻。411p., 産業図書。
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖。
- ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定。ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」, p.39-40.
- 坂井良輔・小林正史・藤田邦雄 (1996) 灯明皿の脂質分析。富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告第7集「梅原胡摩道遺跡発掘調査報告書 (遺物編) 第二分冊」, p.24-37。財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所。

中原舟久手遺跡発掘風景



1号a竪穴検出状態



1号a.b竪穴検出状態



写真図版2



2号竖穴検出状態



2号竖穴遺物出土状態



3・4・10号竖穴検出状態

5号竖穴内土层检出状态



5号竖穴检出状态



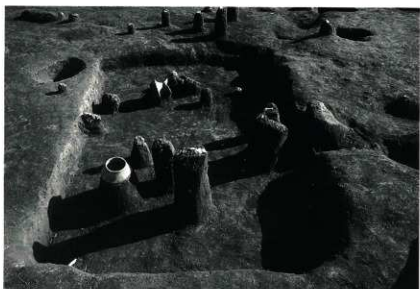
5号竖穴内遗物出土状态



写真图版4



6号竖穴検出状態



6号a竖穴遺物出土状態



7号竖穴検出状態

8号竖穴検出状態



9号竖穴検出状態



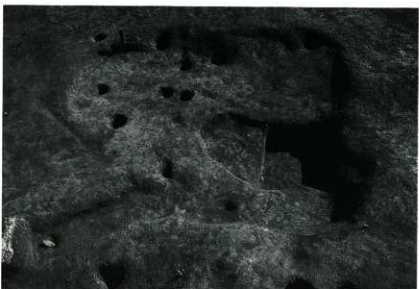
9号竖穴内土坑検出状態



写真图版6



11号竖穴検出状態

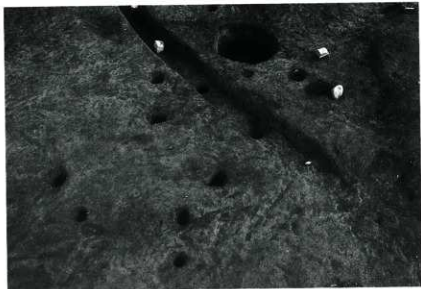


12号竖穴検出状態



13号竖穴検出状態

14号竪穴検出状態



15号竪穴検出状態



16号竪穴検出状態



写真图版8



1号土坑遺物出土状態



2号土坑遺物出土状態



3号土坑遺物出土状態

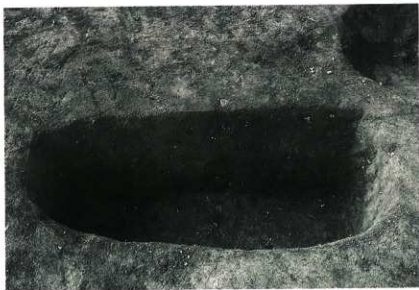
4号土坑半截狀態



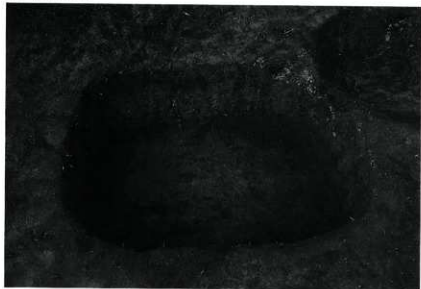
4号土坑検出狀態



5号土坑半截狀態



写真图版10



5号土坑横出状态



6号土坑半截状态



6号土坑横出状态

7号土坑半截狀態



8号土坑半截狀態



8号土坑検出状態



写真图版12



8号土坑床面鉄鏟出土状態



9号土坑半截状態



10号土坑検出状態

11号土坑検出状態



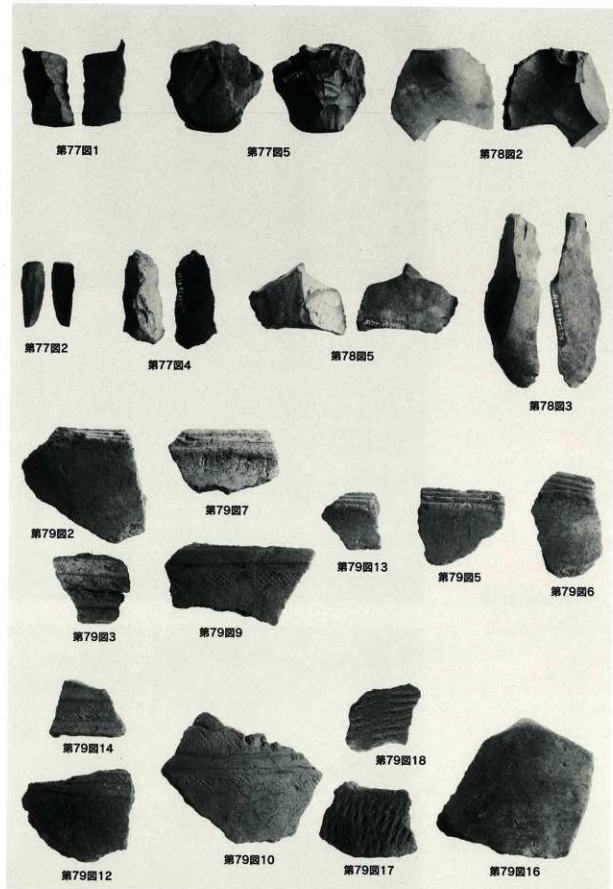
1号溝状遺構検出状態



2号溝状遺構検出状態



写真図版14



旧石器時代の石器と縄文時代の土器



第79図11



第79図15



第79図1



第80図4



第81図3



第81図4



第82図5



第82図3



第82図4



第82図7



第82図6

縄文時代の土器と石器



第23図1



第23図2



第27図7



第12図1



第52図



第41図1

第12図2



第56図1



第56図2



第12図3

弥生時代の土器



第27図4



第34図1



第56図3



第27図6



第31図8



第59図1



第20図



第41図2



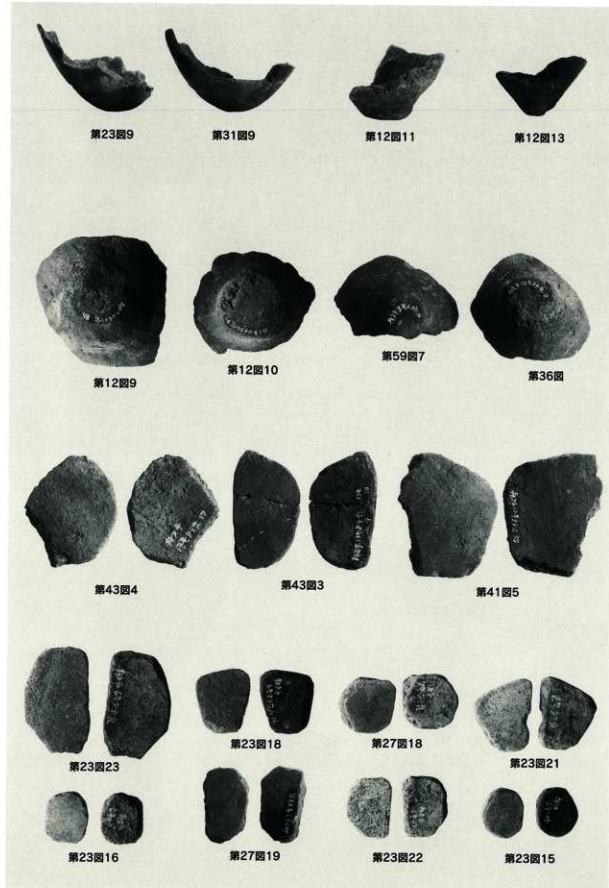
第43図1



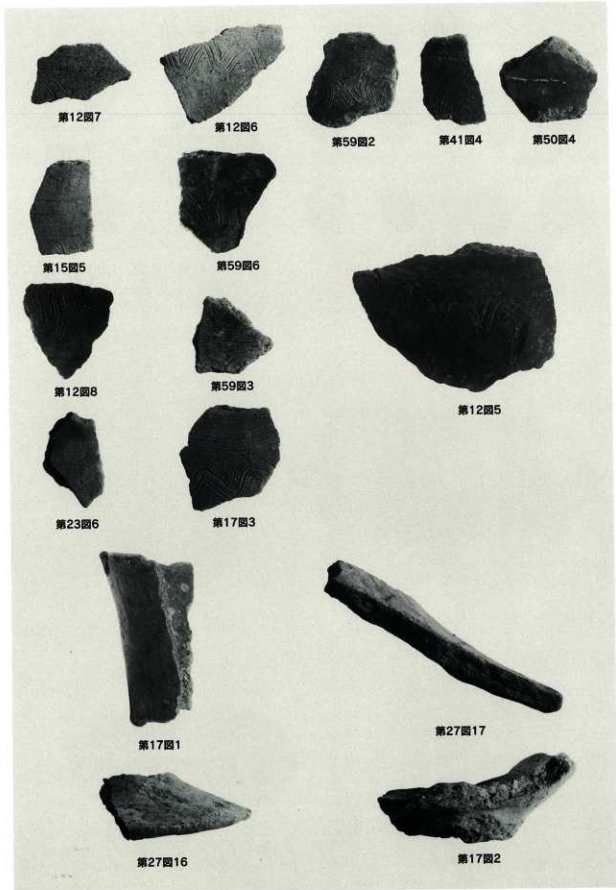
第8図1

弥生時代の土器

写真図版18



弥生時代の土器底部と土器片加工品



弥生時代の土器



第23図20



第23図17



第23図10



第23図14



第23図13



第23図12



第23図11



第9図2



第48図



第9図1



第57図

弥生時代の土器片加工品と石器



第13図



第53図



第25図



第81図1



第24図



第81図2



第21図1



第46図



第10図



第65図



第29図

弥生時代の石器、土製品、石製品、鉄器

報告書抄録

ふりがな	なかばるふなくていせき
書名	中原舟久手遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第107輯
編著者名	栗田勝弘
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分県大分市内町3丁目10番1号 TEL097-536-1111
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中原舟久手遺跡	大分県大野郡大野町 大字中原舟久手	44426	新発見	33°0'9"	131°30'45"	19971014 5 19980206	3,000㎡	県道三重 野津原線 改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中原舟久手遺跡	集落	弥生後期後半 ～終末前後	竪穴住居跡 22基 土坑 13基 竊立柱遺構 5基 溝状遺構 4本	弥生土器・石器・鉄器	土坑墓

中原舟久手遺跡

大分県文化財調査報告書 第107輯

平成12年3月31日

発行 大分県教育委員会

印刷 (株)久恒日昇堂印刷
